死んだ眠り姫

成海 燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死んだ眠り姫

【Ｎコード】
Ｎ１２５６Ｖ

【作者名】
成海　燐

【あらすじ】
遠く離れた、異世界を治める姫達が死んだ。

１６年後、遠く離れた地球で、転生した姫達の前世の記憶が目醒める。

地球に転生した、５人の“プリンセス”。
寝ることが大好きな少年、姫野絢斗につけられたあだ名は“眠り姫

”。

彼は5人のプリンセスの1人、“眠り姫”の名を持つ王子、ローズの転生だったーー

前世と現世の命に翻弄される転生者達。

１６歳の誕生日、姫達の命をかけた闘いが地球へと舞台を変え、始まる。

改稿作業、終了しました！

プロローグ（前書き）

大変長らくお待たせしました。
改稿作業が終わりました。
今までの死んだ眠り姫からは大きく変わっております。
以前読んでいただいた方も、最初から読んでいただけると嬉しいです。
以前のものを知っていただいている方でも、楽しんでいただけるよう、以前のものが大きなネタバレとなることはないように設定変更を行なっております。

どうか感想、評価よろしくお願いします。

プロローグ

全てが、一瞬だった。
一瞬で、無くなった。
友だったはずだった。
幸せだった、はずだった。
城も、家族も、幼なじみも、皆、無くなった。
あるのは、瓦礫と死体だけ。
死臭漂う中で、少年は虚ろな目で、腹に刺さった銀色に光り輝く剣が引き抜かれ、自分の血が溢れだす様を、ただただ見つめていた。
自分が死にゆく様を。
国が、壊れるのを。
少年は、自らの血だまりの中で、静かに、しかし深く、息を吸った。
澱んだ空気が、肺に染み渡る。
それと反比例するかのように、意識は薄くなってゆく。
それはこの世界で、この体での最後の呼吸となった。
誰かが自分の名前を叫ぶ、声がした。

第一話

青い空が広がり、強い日差しがカーテンの向こうから差し込んできた。

四時限目のチャイムが鳴って数分たった頃、先程まで黙っていたのが嘘のように蝉が五月蝿く鳴き出す。

すると、朝登校してマイ枕をセットし、今の今までずっと机に突っ伏したままだった、窓際の席の一人の少年がうっすらと目を開けた。

普通なら学校で目を開けて目の前に机の木目が見えた時点で自分の居眠りに気付き、飛び起きるだろう。しかし、この少年は枕を持ち込んで来ている時点で普通ではなかった。目の前の木目はいつものことだと言わんばかりに再び目を閉じる。

が、夏の容赦ない蝉の耳をつんざくような鳴き声が二度寝を妨げたらしい。

「うるさいなあ。耳痛いって」

そうつぶやいた少年の閉じられたままの目のまつ毛は長く、少女のような綺麗な顔を併せ持つ少年の寝顔は可愛いとクラスの女子に人気が高い。

起きた時の彼は勉強はそれほどではないが、スポーツ全般が得意で、剣道部の期待のエースであるため、カッコ可愛いと実際にファンクラブができてしまっているほどの人気である。

「うるさい。蝉の馬鹿」

おさまらない蝉の鳴き声に、再び少しだけまぶたをあげて、少年は迷惑そうに窓の外を半開きの目で睨んだ、が。

「馬鹿はお前だっ！　姫野！」

ぱすこんっと女教師に教科書で頭を叩かれると、少年――姫野絢斗（ひめのあやと）は重いまぶたをまた少しだけ持ち上げ、衝撃の出元を視線で探り当てた。その視線の先には、こめかみをヒクつかせながら古典の教

科書を丸めて握って立っている、短い髪の、若い女教師。
「あー。この授業、たーちゃんのだったかー……くー」
その姿をみとめて絢斗は困ったような顔をするが、すぐまた目は閉じられる。
目の前で睡眠に入る生徒に、このクラスの担任でもある彼女――田島緑（たじまみどり）、通称たーちゃんは眉を吊り上げて怒鳴った。
「先生に向かってたーちゃん言うな！　起きろっ！」
再び、ぱすこんっ。
しかし、聞こえるのは安らかな寝息のみ。先ほどまで五月蝿くしていた蝉は何時の間にか静かになっていた。
「ひ、姫野！　起きろー！！」
ぱすこんっぱすこんっぱすこんっ。
しかし、どれだけ教科書がしなっても、絢斗はピクリともしない。
田島の手の中の、通算三十五回もの全ての授業において酷使された憐れな古典の教科書は、すっかりボロボロになってしまっていた。
「先生～授業進めて下さ～い。無駄で～す」
「眠り姫を起こすなんて無謀なこと、もう田島先生くらいしかやってないっすよ」
「他の先生方はもう諦めました」
他の生徒からの苦情が飛ぶ。何しろ古典の度に毎回これが繰り返されているのだ。このクラスだけ授業が遅れる訳にはいかない。
田島はいつものように絢斗を目覚めさせることが出来ないまま、歯ぎしりしながら教壇に上がった。
「むぅぅぅ。じゃあ、助動詞「る」の活用、誰かわかる人……くそっ！　次は起こしてみせるっ！」
ぱすこんっぱすこんっ。
新任教師の彼女は、古文の助動詞の活用形を書いた黒板を、絢斗の頭の代わりに悔しそうに叩いた。何時の間にか彼女にとって絢斗を起こすということが目標になっているのは言うまでもない。

ここ、自由山高校一年二組では、いつものように夏休み前の気だるい時間がのんびりと進んでいた。
四時限目の古文が終わると、何人かの生徒は学食の限定メニューを手に入れる為に教室から走り出していく。他の殆どの生徒は、仲の良いグループでかたまって、弁当を開きはじめる。
「おーい、眠り姫の絢斗くん、昼だぞ～」
一時限目から昼休みまで、四時限目の蝉がうるさくなった時に一度は目を覚ましたものの、それ以外はずっと寝っぱなしの絢斗を、後ろの席の坊主頭の少年――山本健太（やまもとけんた）が背中を蹴って起こした。野球部の彼はこんがりと日に焼けており、生まれつきの薄い眉と細目のせいでイカつく見られるが、付き合ってみれば無邪気な笑顔をもつ、人のいい奴である。絢斗とは入学して隣の席になって馬があってからずっとつるんでおり、殆ど寝ている絢斗の優しい世話人でもある。
「ふぁぁ。もう昼ー？」
五回ほど蹴られてやっと、あくびをしながら起きた彼の目はまだ半開きだ。
「さっき、お前のせいで古文のたーちゃんから山盛りの宿題でたぞ」
山本はげんなりした顔を絢斗に向けた。
「げっマジかよ。山本、起こしてくれれば良かったのに」
絢斗の目がやっと全開する。
「先生に言われて起きられない奴が俺に言われて起きるか？」
「……起きないだろうな」
少し考えて、絢斗は素直に頷く。
「仕方ない。俺の夢は寝溜めが出来るように人類を進化させるコトだからな。そのためにも、寝なくては」
「あほか。くだらねー。だから『眠り姫』なんてあだ名がつくんだよ」
絢斗は学校中の教師どころか生徒にまで『常に寝ているカッコ可

愛い一年男子』として名前が通っており、姫野という名字ともかけてか、いつしか『眠り姫』とあだ名がつくまでになっている。
「なんと呼ばれても構わねぇ。俺は睡眠とふわふわの枕をこの世で一番愛してる」
机上の枕をぎゅっと抱きしめる絢斗に、キモッと山本は呟いた。
「あー、はいはい。お前、そういうとこさえ無ければ顔良いし、モテるし、すげー奴なんだけどなぁ」
山本が、呆れ顔で自分の弁当箱の蓋を開けた。
そこに大きなエビフライが入っているのを見て、思わず顔をほころばせる。
しかし、そのエビフライは一瞬で消え去ることになった。
「エビフライ――っ！　あー！」
先程まで枕を抱きしめていたはずの絢斗の手には箸が握られ、その頬はもぐもぐと動く。
山本の視線に気付いた絢斗はけろっとした顔で感想を一言。
「うん？　あ、これ美味しかったよ？」
「いやいやいや、他人の弁当とるなー！！」
山本が怒るのも無理はない。エビフライは滅多に出現しない山本の大好物のお弁当メニューである。
「だってお前んちの、美味いもん」
ちなみに、絢斗の母は破壊的と言っていいほど料理は下手である。
「そう言ってくれるのは嬉しいが、奪っていい理由にはならねぇっ！」
「じゃあ俺の白米いる？」
「なんでエビフライの交換が白米なんだよっ！」
「あー！　白米を馬鹿にしたな？　全国の米農家の皆さんに謝れっ！」
「白米は悪くねぇっ！　　そのべちゃべちゃが白米の評価を暴落させてんだよっ！」
びしっと指をさされた先には、お粥に近いごはんが絢斗の弁当箱

に詰められ、鎮座していた。
「今日は母さん作なんだよなぁ。妹か俺が作ればもうちょいましなんだけど、母さん下手の横好きでさ。大丈夫、お粥だと思えば！」
自分のごはんの出来は理解しているらしかった。
「ぐ。でもさ、普通エビフライの交換なら、ハンバーグとか……」
山本は絢斗のハンバーグをチラリと見やる。すると絢斗は意外な顔をした。
「いいの？　これで。一番マシなのが白米だから、白米すすめたんだけど。食べてくれんなら嬉しいよ」
「えっ？」
山本はひょいと絢斗のハンバーグを箸で掴み上げ、まじまじと見る。
ほんのりと焦げ目のついた肉と玉ねぎ。デミグラスソースなのか、茶色いソースもいい具合にかかっている。
見た目は、普通である。
しかし、絢斗は首を振る。
「最近さ、ハンバーグは見た目まともにできるようになったんだよ。でも――」
山本は絢斗の話を最後まで聞かず、試しに一口かじってみた。
冷たくなってはいるが、食感はなかなかである。味は――。
「ん。なんだ、普つ――――じゃねぇ！　ぐぇほっぐぇほっ、み、水……」
絢斗はあらかじめ用意していた水筒の茶を、咳き込む山本に差し出した。ぐびぐびと飲みほす山本を呆れたように見る。
「だから言っただろ。自分で作れるようになるまで母さんの料理で育ってきた俺でもマズイと思うからな」
「な、なんか言い表せねぇ味が。くっ、まだ後味がっ」
その味を上書きしようと料理自慢の自分の母作の弁当をかっこむ山本に、絢斗は苦笑する。
「ふぅ。エビフライは許してやる。不憫でならん」

どうにか落ち着いた山本は口を拭きながら、残ったハンバーグを口に運ぶ絢斗を憐れみの目で見つめた。
山本があれだけ苦しんだ味も、長年口にしている絢斗は少し顔をしかめただけで飲み込んだ。
「どーも。白米は、べちゃっとしてるだけなんだけど、他の味付けはどうやったらこうなるのか謎なくらいだろ？」
マズっと言いながらも、絢斗は弁当を食べ続ける。
誰かが作ってくれたものは絶対に残さない主義である。
「ああ。親父さんは？　何も言わねーの？」
「夫婦揃って味音痴なんだよ。困ったもんだ。いっそのこと自分もそうだったら良かったのにと何度思ったことか！」
そう力説する絢斗に、山本は心から共感した。
「姫っ！　お前は、これをずっと耐えてきたんだな！」
「おぅ。分かってくれたか、山本よ……」
「これからはちょくちょく俺の弁当を差し入れようじゃないか」
「心の友よっ！」
再び友情を確認し合い、ガシッと手を握り合う二人。
事情の知らないクラスメイトには、少々変な目で見られていたことは知らない。

第二話

その日の剣道部の練習が終わったのは、午後五時三十分。夏真っ盛りの空はまだまだ明るく、太陽は元気いっぱいである。

「あちー。ムシムシするー」

絢斗はタダで配られた学習塾のロゴが入ったうちわで、汗ばむ顔に向かって思いっきり扇いだ。が、頬に当たる風はぬるい。

「ぬりー」

「だりー」

「アイス食いてー」

絢斗のそばにいる三人の同級生の男子部員達も、同じ様に暑さに文句をブツブツと呟きながら歩いていた。

七月も半ばに入り、夜でも暑い日が続いている。部活終わりの学生には辛い季節だ。

シャワーを浴びてサッパリとしたはずの肌に再び汗がにじみ出す。

疲れている上に暑いので、剣道場から駐輪場に向かう剣道部男子達の動きはのろのろとしていてだらしがない。他の部の部員たちも同じようなものである。

そんな彼らに、後ろからピシッとした声がかかった。

「皆、馬鹿ね。キビキビ動けば、早く涼しい場所に帰ることが出来るのに」

「――白崎っ」

振り返った絢斗以外の三人は、すぐ後ろを歩いていた少女の姿を見て顔を強張らせた。

のろのろ男子集団にキツイ言葉を浴びせたのは、自由山高校剣道部のただ一人の女子部員、白崎由姫（しらさきゆき）だった。

彼女は赤いカチューシャをつけた、肩につかない程度に切りそろえた綺麗な黒髪を、さらさらとぬるい夏の風になびかせていた。

部室棟にあるシャワーを浴びた為か、ほんのりと甘いシャンプー

の香りが鼻をくすぐる。ちなみに男子からはシャワーを浴びたからといっていい香りはしない。
彼女は身長が１５０センチとやや小柄な為か、自然と上目遣いになるその目つきは睨みつけるようで決して良いとは言えない。が、切れ長の目は大きく、色白の肌にはっきりとした整った顔立ちを持つ為、黙って立っていれば飛び抜けて綺麗な少女だ。
その容姿と名前からか、『白雪姫』とあだ名がつく程である。しかし根が悪い訳ではないのだが、尊大な口調で堂々と思ったことをそのまま喋ってしまう性格の為、女子の友達は皆無といっていい。
男子の中には熱狂的なファンと呼べる者達はいるが、彼女自身は全く相手にしておらず、友達と呼べる男子もいない。
部活内ではというと、練習中の彼女は恐ろしく強く、鬼のように厳しいので、ほとんどの剣道部員の男子は彼女に尊敬と恐れを抱いているが、親しくなろうとする者はいない。
ただ、彼女――由姫にはたった一人、幼なじみがいた。
三人の男子が同じ一年生であるにもかかわらず、由姫のかけた一声で固まってしまっている中。
「由姫、珍しいな。いつもすぐ帰るのに」
ただ一人、他の誰かと接するのと同じように、笑顔で彼女に声をかけたのは、生まれた病院も日にちも同じで、家も斜め向かいにある、幼なじみの絢斗。
赤ん坊の頃から一緒だった彼にとっては、由姫は近づき難い美少女ではなく、ただの幼なじみなのだ。
由姫にとっても、他の絢斗を取り巻く女子達とは違って、絢斗はただの幼なじみである。
二人は母親が入院中に仲良くなり、たまたま家も近所だったこともあり、家族同然の間柄ともいえる。
「女子シャワー室がとても混んでいたのよ。一つシャワーが潰れていたとかで」
由姫は首にかかる制服の青いチェックのリボンをいじりながら、

面倒そうに説明した。
運動部の女子生徒のほとんどが共同で使うシャワー室は、いつもかなり混み合っている。由姫はいつもかなり早い方なのだが、それでも一つ減ったシャワーのおかげで、遅くなってしまったのだ。
いつも部活後にはシャワーを浴びるとすぐに帰ってしまう由姫がまだ残っていた理由は分かった。絢斗は聞きながらふと思いついたことを口にする。
「へぇ。あ、せっかく会ったんだからさ、一緒に帰――」
「結構よ」
「早っ！　何で？」
最近はあまり話もしていないので、久しぶりに一緒に家まで帰るのもいいかと思って絢斗が誘うが、それはいい終わる前に切り捨てられた。
「だってほら、見なさい。貴方のお友達が嫌がっているじゃない」
そう言われて、絢斗は初めて周りを見る。いつも一緒に途中まで帰っている面子たちは皆、無言でブンブンと首を振っていた。その目は必死に拒否のメッセージを送っていた。
「あー……」
絢斗は苦笑い。
いつも由姫にしごかれている彼らは、由姫と一緒に帰るとなると恐ろしくて仕方ないのだろう。
気持ちはわかるが、本人を前にしてよくその行動がとれるものである。
「……」
誰も何も喋らない、気まずい空気が発生する。五人はその場で突っ立ったまま、数秒が経過した。
そんなあまりいいとは言えない空気を破ったのは、すぐ近くから聞こえてきた携帯の着信音だった。
「先輩」
ぼそりと由姫が呟く。

ピロリロリン、と小気味よい着信音が鳴った携帯を取り出したのは、帰ろうと同じく駐輪場へ向かう剣道部の二年生の三人グループの一人だった。
彼は軽く操作し、メールを確認するとすぐに目を見開いた。
「あー！　今日ドンカラ半額日だ！」
「なにぃっ！？」
その叫びに呼応して他の二年生男子達も各々の携帯を取り出し、メールを確認し始めた。
メールを読む彼らは皆一様にニヤリとしだす。
ちなみにドンカラとは学生に人気のあるカラオケチェーン店である。時々不定期に会員には半額クーポンがメールで送られてくるのだが、今日それが送られてきたらしい。
「今から行こうぜ」
「よしっ。ＡＫＢの新曲歌う！」
「おう。行かなきゃ損だ！　ん？　　よ、一年諸君、何突っ立ってる――あ」
「うおっ、白崎……」
カラオケの話題に盛り上がる中、ふと変な空気を放つ、突っ立ったままの後輩の存在に気づいた二年生たちは、由姫によるその場の気まずい雰囲気からおおよその状況を瞬時に読み取ったらしい。
三年生よりも一年生と近しい二年生は、可愛い後輩を見捨てることはしなかった。
「ち、ちょうどいいじゃん。お前らも、一緒にこねぇ？　　カラオケ」
最初にメールに気づいた二年生が一年生五人を誘う。
「い、行きますっ」
「俺もっ」
「行きたいっす！」
絢斗と由姫以外の、その場を早く抜け出したい三人の一年生は、一斉に勢いよく手を挙げる。形式上由姫も誘われているのだが、こ

れは由姫は絶対に断ると読んでのことである。
その読み通り、由姫は誘いを断った。
「折角ではありますが、私は遠慮させていただきます。お誘いありがとうございます」
「お、おう……」
由姫のいやに丁寧な辞退の言葉に、上級生である二年生でも少したじろぐ。
直接由姫に関わることは少ないのだが、なんだかんだいって彼らも由姫が苦手だったりする。
「姫野、お前はどうする？」
残った絢斗に由姫以外の全員の目が集まった。
「あ、俺はパスします。今日はカレーが待ってるんで」
集中する視線には慣れているのか、特に気にする様子もなく、きっぱりと断る。今日のカレーは妹の特製カレーという話なので、朝から楽しみにしていたのだ。練習で腹を空かせていた絢斗はカラオケよりカレーを優先した。
誘った二年生は分かった、と頷いた。
「じゃ、また明日、練習で」
「はい。お疲れっした！」
「お疲れ様です」
「おつかれ～」
深々と礼をする由姫と笑顔で手を振る絢斗の対照的な姿を背に、二年生は一年生三人を引き連れて、どこか早足で立ち去っていった。
彼らが見えなくなった頃、由姫はやっと頭をあげた。顔にかかった黒髪をさっと耳にかけると、由姫の長い礼を待っていた絢斗を無視して歩きだす。
「ちょ、おい！」
絢斗は黙ったままの由姫を慌てて走って追いかけ、追いつくと横に並んで歩き始めた。
「俺が並んで歩いてても何も言わねーってことは、一緒に帰ってい

いんだ？」
そう問うが、由姫はまっすぐと前を見たまま絢斗の方を見ようともせず、何も答えない。が、拒否することもない。
絢斗はそれをＯＫのサインだと勝手に解釈し、そのまま速いリズムの由姫の歩調に合わせることにだけ集中した。
数分後、駐輪場に着いた二人は各々の自転車にまたがり、校門を一緒に出た。というよりは先々いく由姫に絢斗が慌てて着いていく、という感じではあったが。
「最近はあの人たち、居ないのね」
先ほどまで黙っていた由姫が、ふいに帰宅する生徒で溢れかえる校門を誰かを探すように振り返りながら、小さな声で呟いた。
「ああ、あいつらか？　通行の邪魔だし、迷惑だからやめてくれって頼んだ」
「あの人たちが、よく聞いてくれたわね」
「代わりに一人ずつツーショット写真を撮らされた」
「ふふっ。あの人たちらしいわね」
珍しく、由姫が声をあげて笑った。あの人たち、というのは絢斗のファンクラブ的な団体のことである。
絢斗が入学して三ヶ月ほどだが、知らぬ間に結成されていたその団体は、試合や練習には常につきまとい、下校時もいつも校門で待ち構えていた。
剣道部としても、絢斗個人としても、非常に迷惑であった為、ついこの前、団体のリーダーを名乗る城山花（しろやまはな）という二年生との協議により、メンバー全員と絢斗がツーショット写真を撮ることで、とりあえず迷惑行為をやめさせたのだった。
「私、あの人たちが鬱陶しくて仕方がなかったの。よかったわ」
「もしかして、最近俺を避けてたのも？」
「そうよ。私が貴方と並んでると、とても嫌な目で睨んでくるし、靴には画鋲が入ってるし、机には落書きされているし」
「うわ……」

絢斗の知らないところで、被害は由姫にまで飛び火していたらしい。由姫以外に親しい女子生徒はいないが、絢斗はこれからは気をつけておこう、と心に留める。
「もしまた何かあったら言えよ。俺が――」
「結構よ」
「――っへ？」
一言、バシッと言ってやる、と息巻こうとした絢斗の言葉は由姫によってまたも遮られた。
「すでに仕返しはしたから。目撃情報を辿って、相手の靴箱に大量の虫を詰めておいたわ」
「――あ、そう」
やることがお互い小学生である。少なくとも、由姫が黙ってされるがままになっているということはあり得ないことなのだと、絢斗は再認識する。
「それでも、貴方と帰ると、この前までは彼女たちが校門でぎゃあぎゃあ五月蝿いから、嫌だったのよ。全く、貴方も大変な人たちに好かれたものね」
そんな由姫の言葉に、絢斗は心外だ、といった目を向ける。
「お前だって信奉者みたいな奴もいたじゃん。ほら、四月にさ――」
「あの話はやめてくれないかしら」
由姫は思い出したくもない、といった顔で思いっきり顔を顰めた。
今は完全に鎮静化しているが、彼女を崇める奇妙な集団が四月に大騒ぎを起こしたのもまた事実である。
「ふん、もういいわ、それじゃ、また明日ね」
由姫はブレーキをかけ、自転車を止めた。
「え？」
同じように自転車を止めて回りを見回すと、そこはもう由姫の家の前だった。その斜め向かい、すなわちすぐ目と鼻の先には絢斗の家がある。
学校から自転車で数分の距離にある家に、知らぬ間に着いていた。

由姫は『白崎』と表札のある家の門を開き、自転車を押して入る。その木の門は、平均的な家よりかなり大きい。今は看板を降ろしてはいるが、由姫の祖父の代までは剣道の道場を開いていた。だから道場を併設している白崎家の敷地は門が大きいだけでなく、かなり広い。

比べて絢斗の家は、今は単身赴任で大阪にいる父が建てた築１６年と新しくはあるが、小さな日本の平均的な二階建ての一軒家である。

「じゃ、また明日」

「ん。……あ」

そう一言だけ言うと、絢斗の返事も待たず、由姫はバタン、と門を閉め、その姿は見えなくなった。足音が、遠ざかっていく。

「また、明日……ん、痛っ」

突然頭にズキン、と痛みが走る。大した痛みではないが、不快ではある。

「風邪かなぁ。頭痛てぇ。早く飯食って寝よ」

呟きながら絢斗は、カレーの待つ自分の家へと、自転車を押し始めた。

第三話

「ただいまっ、カレーっ！」
絢斗は玄関に入るなり、靴を脱ぎながら好物の名を呼んだ。
廊下には、カレー特有のスパイシーな香りが充満しており、絢斗の鼻をくすぐった。
「おかえり、アヤくん。ミナちゃんがもうよそってくれてるわ。手を洗ってうがいしてきなさい」
ダイニングから廊下に出て、帰宅した絢斗を迎えたのは母の紗綾（さや）。今年四十五歳になる彼女は、山本を悶えさせたあのハンバーグの製作者であり、スーパーのパートタイムで働くごく普通の主婦でもある。
飛び抜けて美人な訳でも若く見える訳でもないが、温厚な性格で、いつもにこにこと笑顔を絶やさない為か、近所には主婦友達が沢山いる。
家事も料理を除けばきちんとしていて、良き母でもある。
「あれ……母さん、そのエプロンは？」
絢斗は紗綾のつけている、可愛らしいベージュの犬のプリントがされたエプロンに目を留めて言った。
彼女は料理が下手の横好きで、エプロンもしょっちゅう買ってきては料理する時につけているのだ。今朝の弁当も、おニューのエプロンをつけてみたかった為に、皆の反対を押し切って作ったのである。
ちなみに、何枚も買い換える必要があるのは、一度料理に使えばそのエプロンは、焦げていたり、調味料にまみれていたり、裂けていたりと、使い物にならないからである。
今朝のエプロンはネコ柄だったはずだ。そのエプロンはデミグラスソースもどきによってベタベタになってしまっていた。今、新たなエプロンをしているということは。

そのことが示すであろう事実に、絢斗の背中に、嫌な汗が流れた。同時に、鈍い頭痛も襲ってくる。
カレーは、犠牲になったのか。
反対に紗綾は嬉しそうな顔で、エプロンの端をつまんでみせた。
「ふふ。可愛いでしょ。ワンちゃんなの」
「いやいや、そうじゃなくて！　カレー、母さんが作ったの？　っ痛……」
思わず大声を出してしまって、頭痛にひびいた。
「あら、頭痛いの？　何、私がカレー作っちゃ悪いの？」
「頭は大丈夫……けど、カレーは大丈夫じゃないっ！」
楽しみにしていた妹作のカレーが紗綾作となると、天と地ほどの差がある。
紗綾はため息をついた。
「失礼ね。大丈夫よ。お母さんは、ちょっとお野菜を切らせてもらっただけ。他は全部ミナちゃんが作ったわ。ほら、エプロンも、綺麗」
そう言って再び見せたエプロンには、よく見れば包丁による傷なのか、小さく裂けたところが見受けられるが、まだ使えそうである。
例え野菜はこの母に切られたといっても、妹の美波は料理は大変上手であるので、少なくとも味な大丈夫なのであろう。絢斗はホッと安心した様子で息をついた。
外が暑くて汗をかいたせいか、はたまた変な汗をかいてしまったせいか、急に体が冷えて、絢斗は身震いした。
「風邪かしら。お薬飲んでおきなさいね」
「へーい」
気のない返事をして、絢斗はカバンを二階の自分の部屋に置きに行き、一階に降りてダイニングに行く前に、洗面所で手を洗ってうがいをする。風邪でもひいて練習を休んだら由姫の雷が落ちるので、いつもより念入り目に、だ。
ダイニングに入ると、自分の席には、ほかほかと湯気を立てるカ

レーライスが大盛りで配置されていた。
紗綾と美波はすでにスプーンを握って待っている。
中学三年生の妹の美波は、陸上部に所属しており、スプリンターである。小麦色に焼けた肌とポニーテールにしたセミロングの黒髪は夏らしさを感じさせる。
由姫のような整った顔立ちではないが、そのはつらつとした性格が男子にも女子にも好かれるらしく、小学生の頃からよく手紙をもらっている。
「お兄ちゃん早くっ！」
「わり……あれ？」
美波に急かされて席につくと、目の前にしたカレーに何か違和感を感じた。
「具……は？」
具が無かった。スプーンでどれだけかき回しても、入っているはずの玉ねぎも、にんじんも、ジャガイモも見つからない。辛うじてミンチになった肉の細かい粒は、スプーンにのっかっていた。
「お母さんがさ、どーしても新しいエプロン試したいって言うから、具を切ってもらったら……こうなっちゃった。野菜は、細か過ぎて煮込んだら溶けちゃって。あ、味見はしたから、味は大丈夫。さ、食べよ」
「……」
美波が理由を教えてくれるが、本音を言うなら紗綾には手伝わせて欲しくなかったものだ。
「いっただっきまーす！」
紗綾だけが、嬉しそうに、手を合わせる。
「い、いただきます」
「……いただきます」
美味しそうに食べ始める母を横目に、兄妹も具がないカレーを口に運んだ。
食感は当然、ご飯しかほぼ感じられない。時折ご飯粒に紛れ込ん

だ肉が舌に触れるくらいである。
　しかし、さすがは美波というべきなのか、口の中に広がる濃厚な味は、絢斗をうならせた。
「んまっ！　前より旨くなってる！」
「へへ。今日はちょいと工夫したんだー。それに、野菜も溶け込んでるから、かな」
美波もぱくり、と美味しそうにカレーを頬張りながら、照れ臭そうに笑った。
「じゃあ、お母さんも貢献したわね」
「……んー」
　この母親にそう言われると、二人は困った顔になる。
「え？　どうして？」
　紗綾は不思議そうな顔で子供達を見た。
「やっぱり、形のある具が欲しい……」
「うん。少しルウに野菜が溶け込むくらいならいいんだけど、無いのは、ね」
　二人は正直な感想を述べる。しかし、紗綾は。
「そっか……じゃあ、お母さん、次はがん……！」
「……ばらなくていいっ！」
　懲りない母親に、絢斗と美波は口を揃えて次回作を遠慮した。
「えーっ」
　紗綾は残念そうな顔をする。
「むー……」
「……ぷはっ」
「……あはっ」
　頬を膨らませた紗綾のその顔に、絢斗と美波は思わず吹き出した。
　笑い声が響く。姫野家ではよくある光景。平和ないつもの食卓であった。

＊＊＊＊＊＊

二階にある自分の部屋に戻った絢斗は、ベッドに倒れこんだ。柔らかなマットレスと布団が絢斗の体を包み込む。絢斗はお気に入りの枕となっているふわふわのクッションを引き寄せ、顔を沈めた。

「むふぅ。帰ってきた感じがする……」

ベッドとの朝の辛い別れから約十時間。こうして寝転んでいるのが絢斗にとって至福の時だった。

山盛りの宿題があっても、金曜である今日に、宿題をする気にはなれない。それに、なんだか今日は体調が優れない。

「あー頭ガンガンする……」

時間が経つにつれ、次第に強くなっていく痛みに、絢斗は顔を顰める。

部活の練習中は何もなかったはずのに、帰宅した頃から急に頭痛に襲われた。カレーを食べている間はあまり気にならなかったが、今は全身の倦怠感も感じるようになっている。

引き出しから体温計を取り出し、制服のシャツのボタンを二、三個外し、脇に差し込んでみた。

数分後、ピピピピ……という電子音と共に表示された数字は３７．６℃。立派な微熱である。

「あちゃー。昨日クーラーかけっぱなしで寝たのが悪かったかな」

この調子でいくと、これからまだまだ酷くなりそうである。絢斗は一階に降り、救急箱から頭痛薬を取り出し、キッチンで水をコップに注いだ。

「あれ？　お兄ちゃん、風邪？」

リビングでテレビを見ていた美波が、キッチンで錠剤を口に放り込む絢斗に気付いて声をかけた。紗綾は風呂に入っているようで、リビングには居ない。

絢斗はこくり、と錠剤を水で流し込むと、美波の心配そうな顔を

見た。
「ん。大したことない。母さんに明日は七時に起こしてって言っといて。俺もう寝る」
本当は寒気もするし、立っているのも結構辛いのだが、妹には強がってしまう。
「明日も練習なの？」
「そう。休んだら由姫に怒られるから、早く寝て治す！」
それは本音だった。中学の頃、絢斗が試合前にインフルエンザにかかってしまった時の由姫はかなり恐ろしかった。
美波はふふっ、と小さく笑う。
「由姫姉ぇらしいね。あ、お兄ちゃんお風呂はどうするの？」
風呂から聞こえてくる母のシャワーの音で思い出したようだった。
「シャワー浴びてきたからいいや。歯だけ磨いてくる」
絢斗は自分が汗臭くないか、くん、と一応嗅いでみるが、特に何のにおいもしなかった。
「おっけ。お母さんには伝えとくよ。七時だね」
「サンキュ。じゃ」
「お大事に～」
美波が視線を再びテレビに戻すと、絢斗は洗面所へと向かい、歯を磨く。
時折ガンガンと打ち付けるような痛みが頭を襲う。
「うげ……酷くなってきた。早く寝よ」
口をゆすぐと、絢斗は部屋へとふらふらと戻った。
今夜はきちんとクーラーは電源を落とし、布団にもぐる。
「一晩で治ってくれよ……」
願うように呟きながら、目を閉じる。風邪でもなんでも、絢斗はいつものように、目を閉じて三十秒後には寝息をたてていた。

第四話

＊＊＊＊＊＊

遊んでいた。緑豊かな庭園で、幼い四人の少女たちと。彼女たちは、絵本の中のお姫様のような、レースをふんだんにあしらったドレスで、汚れることなど気にもせず走り回る。

おにごっこだ。

“おに”の絢斗は、彼女たちを一心不乱に追いかける。

「あっ」

つまづいた。気付いたときには地面が目の前に迫っていて、反射的に出した手で辛うじて顔面衝突を防ぐ。

「いたたた……」

小石がへばりついた手のひらには血が滲み、膝は擦りむいてピンク色になっていた。

痛みと情けなさがあいまって、涙が目に溜まる。

「う、うう……」

泣くまいと堪えれば堪えるほど、溢れ出す塩辛い涙は頬をこぼれ落ちた。

「だいじょうぶ？　ろーず」

水色のドレスを着た少女が、“ろーず”と呼ばれた絢斗に、その小さな手を差し出した。

その手につかまろうとして初めて、自分の手も同じくらいの大きさだということに気付く。

痛みを堪えて立ちあがってみると、視線の高さもほぼ同じ。

本当はもっと自分は大きいと思っていたのだけれど、全然違う名前だったような気もするのだけれど、夢だからなのだろうか、何も違和感は感じない。まるで、自分がずっとここにいたかのように。

この少女の名も、その周りに自分を心配そうに見つめている少女た

ちの名も、当然のように知っている。
当たり前じゃないか。幼なじみなんだから。
夢じゃない。だってここでずっと生きてきた。母も、父も、姉だっている。
“ぼく”は、“ろーず”なのだから。
「ありがと。すのう」
握られた手のひらがじん、と痛んだが、もう涙は流れてこなかった。
絢斗、いやローズが微笑むと、それに応えるように、目の前の幼い少女も微笑んだ。

＊＊＊＊＊＊

痛かった。ローズは白い雪の降る中で、自分に覆いかぶさる重たいものを、見た。
左は、母。右は、父。
先ほどまで両親と乗っていた馬車はバラバラになって。二頭の馬は血を流して死んでいた。
「お、お母さま、お父さま……おきて、おもいよ」
触れているその肌は、雪のように冷たかった。両親の目は、固く閉ざされたまま、開くことはなかった。
誰かが、叫んでいた。子供の声。
声が枯れた時、それが自分の声だったのだと気付いた。

＊＊＊＊＊＊

「次は乗馬のお稽古、それから剣術、午後は政治学のお勉強、それからダンスの……」
十二、三歳だろうか、オレンジ色の髪を高い位置で二つに結わえている少女が、魔法で黒板を消しながら、ローズに今日のこれからの予定を伝える。
彼女はローズ付きの魔女、ティアナ。ローズより一つだけ歳上の小柄な少女である。
ローズは黒板の前にたった一つ置かれた机に突っ伏して、口を尖らせた。
「今、歴史やったばっかじゃん。な、ティアナ。ちょっと休憩……」
「ダメです。早く一人前になってもらわなければ」
ティアナは休憩を許さない。毎日の稽古は、ローズにとって重荷でしかない。それはティアナにもよくわかっていた、が。
「女王様、先代が亡くなられた今、先々代である王子のお祖母様がこの国を治めてくださっています。貴方は一刻も早く後を継がなければなりません」
「……うん」
国の為、民の為。ローズは分厚い本を閉じ、馬小屋へと向かった。

＊＊＊＊＊

「姉さん、結婚おめでとう」
ローズは、白いウエディングドレスに身を包んだ姉、ナータに祝福の言葉を贈った。その声はまだ完全な大人とは言えないものの、以前よりは低くなっている。
幼くして親を亡くした姉弟は、これまでずっとそばにいた。しかし、それも今日まで。　ローズの姉、この国の王女ナータは今日、隣国の王子と結婚する。

「ありがとう、ローズ」
ナータは優しく弟を抱き締めた。暖かなぬくもりが、ローズを包んだ。

＊＊＊＊＊＊

「大将ー、いつものやつね」
店に入り、適当なカウンター席に座ったローズは、頬杖をついた。
「はいよっ！　いつものやつね。王子、今日こんなところに来てて、いいのかい？」
すぐさまローズの目の前に置かれたグラスには、なみなみとオレンジジュースが注がれる。
いつも時間を見つけては、こっそりと城を抜け出し、城下町に繰り出しているローズは、この町の人々とは親しく、中でもこの店には毎回訪れている。
「うん。こうして来れるのも、最後かもしれないし」
ローズはオレンジジュースを一口飲んで、少し寂しそうに言った。
「そうだよなぁ。会えなくなるわけじゃあねぇけどな。明日は成人の儀だろ。お前も、明日からこの国の王って訳だ。早いもんだ」
店主の親父も感慨深そうに言う。始めてローズが城を抜け出して、この店に来たのは一体何年前だったか。
「そうそう、聞いたぜ。明日の儀式の後、結婚式もするんだってな。俺も行くぜ。楽しみだ。相手はどんなお姫様だ？」
店主の親父はふと思い出したようにローズに尋ねた。
「知らない。今夜、初めて会う」
ローズは興味なさそうに目を反らした。
明日、ローズはこの国の王になり、顔も知らない姫と、結婚する。

＊＊＊＊＊＊

光に覆われて。魔法が飛び交った。
ローズは仰向けに転がっていた。
霞む目に見えるのは、よく知った、人の影。
影は、一直線に、ローズの腹を突き刺した。
熱い痛みが、じわりと広がる。
死が、やって来た。

＊＊＊＊＊＊

「……っ！　はぁっはぁっはぁっ……。い、きてる……」
勢いよく起きあがった絢斗は、自分の腹をまさぐった。
先ほどまで、長い剣が突き刺さり、血が溢れていた場所。しかし今の絢斗の腹には傷一つついていなかった。もちろん、痛みも感じない。
荒い息をしずめ、しばらく茫然としていた。
「……夢、か？」
絢斗はポツリと呟いた。よくよく考えてみれば、殺された自分は“絢斗”ではなかった。とてつもなく長く感じられた夢では、自分は別の人物だった。

「ローズ……？」
そう、確かに、あの夢の中の世界では、絢斗は“ローズ”だった。その短い人生を早送りで経験した、そんな夢だったか。いや、それとは少し違う。
妙にリアルだった。普段ならすぐに忘れてしまうはずの夢は、今でも鮮明に思い出せる。
新たに経験した、というよりは、ずっと忘れていた経験を思い出したーーそんな感覚である。
“絢斗”がこれまで生きてきた記憶と同じように、“ローズ”の生きてきた記憶が脳に刻まれている。
“ローズ”の家族だって、“国”の歴史だって、幼なじみや魔法のことだって知識として知っている。もちろん、“絢斗”は知っているはずはない。
夢の中で絢斗が見たものは、出来事の断片でしかなく、単に夢の内容を覚えている訳ではない。夢の中で生きていた自分ーー“ローズ”が、経験した出来事だけでなく、当然のものとして持っていた知識も、夢で見た以上のことを、絢斗は何故か知っていた。
「何なんだ、これ……」
絢斗がベッドの上で座ったまま、あれこれ考えをめぐらせていると、ふいに部屋のドアがノックもなしに開けられた。そこで一旦絢斗の思考は遮られる。
「母さん……」
入って来たのは湯気をたてたお粥を乗せた盆を手にした母、紗綾だった。
「あら、起きてたの。ご飯持って来たから、ちょうど起こそうと思ってたところなの。どう、調子は？」
盆を机に置くと、紗綾は絢斗の額に手をあてた。
「ん、もう大丈夫みたいね。アヤくん、今日は朝からすごい熱出してたのよ。剣道部の先生には、お休みの連絡はしたから、安心して」
「え、今何時？」

「夜の六時半よ」
「うわぁ……」
ほぼ丸一日、寝ていたようだ。昨夜から熱っぽいとは感じていたが、朝には治ると思っていた。
部活の練習も休んでしまったから、由姫になんと言われることか。しばらく会いたくない気分だった。
「そういわれれば、すっげー腹減った」
「でしょでしょ。ほら、お粥よ。熱いから気をつけてーーーなあに、その目は」
紗綾は、絢斗のお粥を見る訝しげな視線に気づいた。
「いや、それは、誰の作品かなぁー、と」
絢斗の言っている意味を察した紗綾は、少しムッとした。
「んもう。ミナちゃんが作ったお粥よ。私は一切関わってませんっ！」
「じゃ、いただきまーっす！」
「……」
美波のお粥なら、と、絢斗はお粥に飛びついた。美波のお粥はシンプルながらも少し味付けがされていて、とても美味だった。ハフハフといわせながら、絢斗はものすごい勢いで、お粥をかっこんだ。
しばらく息子の食べる様子を座って眺めていた紗綾だったが、お粥の残りが半分を切った頃、立ち上がって言った。
「じゃ、お母さんは先に下に降りてるわ。食べ終わったら下にいらっしゃい。もうすぐ、由姫ちゃん来ると思うから」
「ふぇ？　由姫？」
今最も会いたくない人物の名が出て、思わず絢斗の手が止まる。
「何言ってるの。今日はお誕生日じゃない。アヤくんと、由姫ちゃんの。毎年、由姫ちゃんがケーキ届けてくれるでしょう」
「うわ……忘れてた」
そういえばそうだった。今日、七月十六日は誕生日。昔は白崎家と姫野家で合同パーティなどをしたものだが、中学生になった頃か

らはなくなった。それからは、由姫が毎年、母親の特製ケーキを持って来てくれているのだ。
紗綾が部屋を出て、一人になると、絢斗は深いため息をついた。気になるのはあの夢と、この訳のわからない“ローズ”の知識。
「そういや、由姫に良く似たお姫様もいたな……」
夢の世界での彼女は、隣国の王女だった。確か、名前はーー。
「知ってるやつが出て来たってことは、やっぱり俺の脳が勝手に作り出した夢、かな」
夢にしては色々とはっきりとし過ぎな気もするが、魔法やらお姫様やらの世界は非現実的なものだ。覚えている夢以外の知識やら出来事やらは、忘れてしまった夢で知ったのだろうと無理やり納得する。長い長い夢の中で、見たことを忘れた夢があってもいいだろう。例え何故かその知識や経験だけが、記憶に残っているのだとしても。
「俺って創造力スゲー」
結局そういうことに落ち着いた。

第五話

お粥を食べ終え、食器をキッチンに持って来たところで、嫌な音が鳴り響いた。ありふれたそのインターホンの音は、おそらく由姫がやって来たことを意味する。

「来た……」

「アヤくーん、多分由姫ちゃんよ。出てー」

「はいはい、わかってるよ」

紗綾に言われ、絢斗はインターホンの親機へと向かう。

紗綾は目の前のソファに座ってテレビを観ているし、多分美波は部屋で漫画を読んでいる。父親が単身赴任先から帰ってくるのはまだまだ先の話だ。まず、家族が帰宅した訳ではない。

絢斗は訪問者が、回覧板か何かを届けに来た隣人であることをダメもとで祈りつつ、恐る恐るインターホンの受話器をあげた。ちなみに、姫野家のインターホンは型が古く、テレビ画面などついていないタイプである。つまり、声を聞くまでは、訪問者が誰かはわからない。

「……はい」

深く息を吸って、次に聞こえてくるであろう相手の応答を待った。

「白崎ですけど」

受話器から返ってきたのは、聞き覚えのある刺々しい声。祈り虚しく、由姫が来たようだ。

「っ……今行くよ……はぁああ」

受話器を置いて、一つ深いため息をつき、玄関へ向かう。その足取りは重く、玄関までの数歩の距離を、出来るだけ長い時間をかけて歩き、心の準備を整える。

「よし、もう怒られても大丈夫、耐えられる……」

絢斗は自分に言い聞かせるようにそう呟き、鍵を開け、ドアを開いた。

「……いらっしゃい」
「こんばんは、アヤ」
緊張しながら開けた玄関のドアの前には、私服姿の由姫が立っていた。白い飾り気のないブラウスに、淡いブルーのスカートを合わせた、女子高生にしては大人しめのコーディネート。しかし、由姫の真面目で清廉なイメージにぴったりと合っていた。
「今年も、ケーキを持って来たわ。お母さんからのプレゼントよ。良かったら食べて」
そう言って差し出したのは、ピンクと水色のリボンで可愛らしくラッピングされた箱。姫野家には三人しかいないので小さめだが、いつもこの中には立派なホールケーキが入っている。由姫の母は菓子作りが趣味で、地味で大人しめなものを好む由姫とは真逆で、可愛らしくて派手なもの好きなので、味はそこらのケーキ屋には負けないし、毎年ラッピングにも力が入っている。
「ありがと。今年も派手だな」
「そうね。中のケーキの装飾もね。私のには、お菓子の家がたっていたわ」
「また食べるのが勿体なさそうだな……」
毎年、どこから食べれば良いのか散々悩むのである。特に美波は勿体ないからと、写真を何枚も撮る。
絢斗が苦笑いしていると、由姫は一歩足を引いた。
「じゃ、私帰るわね」
「え？　これだけ？」
絢斗は思わずそう言ってしまった。てっきり今日練習に行けなかったことについて何か言われると思っていたのだが、由姫はこのまま帰ろうとしている。
「それ以上に、何か欲しいの？」
由姫は眉をひそめた。どうやら絢斗が、誕生日プレゼントの要求をしていると思ったらしい。
「え、いや、違う、その……何か言い忘れてることねぇの？」

「何が？」
全く意味がわからない、といった様子で由姫は問い返す。
「いや、その……」
この時点で、絢斗は悟った。
由姫は、絢斗が休んだことを、知らない。
そうだとしたら、なんて馬鹿なことをしたんだろう、心の中で嘆いた。自分から由姫の機嫌を損ねることを、白状しなければならないなんて。何も言われなかったことに、疑問なんて口にしてはいけなかった。
だが、由姫相手に、今の発言を何もなかったことには出来ないのは目に見えていた。由姫は嘘を見抜くのが得意中の得意なのである。
後悔の中、引き下がれなくなってしまった絢斗は、ゆっくりと息を吸って、言いにくそうに答えた。
「俺が、今日……練習を風邪で、休んだこと」
絢斗のその言葉に、由姫はピクリと小さく反応した。
「貴方、休んだの？」
その口調には、突き刺さるような棘が生えていた。
「あーあ、これだけ？　とか言うんじゃなかった……」
とんでもない失敗をしてしまった、と絢斗は思った。言わなければ、知らなかったのに。
「……知らなかったわ。全く貴方って人は、どうして自分の体調も管理できないの？　……とかなんとか言いたいところだけど、今回は私からはキツく言えないわね」
「……へ？」
由姫の長い説教が始まると身構えて絢斗は、拍子抜けした表情で、由姫を見た。
「貴方、馬鹿？　私が貴方の欠席を知らないということは、私も練習に行ってないからに決まっているでしょう」
由姫は顔をしかめて額に手をあてた。
「はぁ。私としたことが、風邪を引いてしまうなんて、一生の不覚

だわ。気を引き締めないと」
風邪程度で一生の不覚と言うのは大げさだと思ったが、確かに由姫が病気や怪我で学校や部活を休んだのを、絢斗は知らない。由姫にとっては悔しいことなのだろう。
「じゃあ、お互い様じゃん。なんだ、心配して損した」
「だからって、許される訳じゃないのよ。ちゃんと反省しなさい！」
「はい……」
すごい剣幕で怒られて、絢斗はしゅんとなる。
「月曜日にはちゃんと朝練来なさい。またぶり返すなんてことがあった時には……わかってるわよね？」
「はいぃぃっ！」
確実に、竹刀ではなく木刀でボコボコにされる。
「じゃあ今度こそ、帰るわ」
由姫はくるりと絢斗に背を向け庭を戻り、小さな門に手をかけた。鉄が小さく軋む音が聞こえる。
「じゃあまた……」
「あ、そうだったわ」
「え？」
門の外に出た由姫が、思い出したように振り返った。
「忘れていたわ。もう一つ、言っておかなければならないことがあったの」
まだ何か叱られるのか、と絢斗の振ろうとしていた手が止まる。しかし、“その言っておかなければならないこと”は絢斗の予想を大きく外れた。
「まだ昨日の制服を着ているなんて、不潔よ。信じられない」
そう言われて初めて、絢斗は自分の格好に気づいた。昨日は帰ってきて、そのままの格好で眠ってしまい、さっき起きたばかりなのだ。身につけているのは、シワシワになった制服。
「……あー」
「ふん。冗談よ。どうせさっき起きたばかりなんでしょう」

「はい、その通りです……」
絢斗が必死に制服のシワを伸ばそうと引っ張っているのをみて、由姫は意地の悪い笑みを浮かべる。
「言っておかなければならないことは、そんなことではないわ」
「へ？」
絢斗の手が止まる。
「お誕生日おめでとう、アヤ」
由姫は先ほどまでとは違う、優しい笑みを浮かべて、言った。そしてそのまま再び背を向け、歩き出す。
しかしその表情を見せたのは一瞬で、すぐにいつもの無表情に戻る。この世界で由姫のこの笑みを知っているのは、いったい何人いるのだろう。
「お誕生日おめでとう、由姫」
絢斗は由姫の小さな背中に向けて、同じ言葉を贈る。
ちらりと絢斗を見た由姫は、何も言わない。だがその口元はまたにっこりと、優しく笑っていた。

第六話

「お兄ちゃーん！」
背中から、絢斗の妹、美波の声が飛んで来た。二階の部屋から、玄関先にいる兄に向かって叫んでいるのだろう、丸聞こえだ。
「ねえ、さっきのピンポン、由姫姉ぇでしょっ！　あ、それケーキ？　早く、早く開けよー！」
甘いもの好きの美波が興奮しているのがよくわかる。
「はいはい、わかったから静かにしろよ。近所迷惑」
苦笑しながら絢斗が応え、家の中に入る音。
今から姫野家三人で、わいわいはしゃぎながらケーキを食べるのだろう。本当にあの家は仲が良い。
「おかえり、姉ちゃん。美波ちゃんの声、すっごい聞こえるね。喜んでるみたいでよかったね」
由姫が自宅の門をくぐり、玄関の戸を開けると、そこには弟の圭吾（けいご）が座って待っていた。小学四年生になる彼は、小柄で、由姫とは目以外はそっくりである。
由姫は切れ長であるのに対して、圭吾は丸っこいくりっとした目だ。
「そうね、ただいま。圭吾、もうケーキ食べ切った？」
「うん。オレ、甘いもの苦手だから、かなり頑張った！」
「そう。よくできました」
圭吾の小さな頭をなでてやると、柔らかい髪の感触が由姫の手に伝わる。
苦手なものを食べたことを褒めてもらいたくて、玄関で由姫の帰りを待っていたのだろう。圭吾は照れ臭そうに笑った。
その笑顔も由姫のそれとよく似ているのだが、由姫がこのように笑うことはめったにないので、そのことを知っている人間はごく僅か。

「じゃあ圭吾、ちゃんと自分の分は後片付けするのよ。お母さんに迷惑をかけないように。お父さんにも言っておいて」
「うん！」
圭吾が軽いスリッパの音を景気よく響かせながら、台所へ走り去って行くのを見届け、由姫は靴を脱いで、綺麗に揃える。
今日は熱が下がって起きられたのが昼過ぎだったので、ろくに練習も勉強も出来なかった。今の時間までに出来たのは宿題のみ。昨日の部活も休み、体を全く動かしていないのは気持ち悪かった。しかし、無理をして風邪がぶり返しては意味が無い。
「今日はあと、素振りを少しして、明日の予習をして、早めに寝ましょう」
そう決めて呟いた由姫は、一度部屋に戻って袴に着替えると、道場へと向かった。
白崎家にある剣道場は、今は由姫の毎日の自主練と、たまに絢斗が使うくらいで、他に使う弟子などは居ない。由姫の祖父の跡を、父が継がなかったからだ。祖父の影響で絢斗も巻き込んで始めた剣道だったが、由姫にも道場を継ぐ気はない。
由姫はひっそりとした暗い道場に明かりを灯した。少しアップをしてから、竹刀を取り出す。使い込まれたそれは、由姫のマメが硬くなった手に良くなじんだ。
竹刀を振り上げた瞬間、由姫は思考する。いつもなら無心であろうと努めるのに、一人で静かな場所に居ると、映像が頭に浮かんで離れない。
「……っ！　嫌っ」
その映像を振り払うように竹刀を振り降ろしながら呟く。小さいが、竹刀が空気を斬る音と共に、誰もいない道場に響く声。
「もう、あんな風に、死にたくないのっ」
それは昨晩見た、夢。夢だとわかっていた。でも、何故だか割り切れない。
夢の中の本当に小さい頃の自分は、寂しい少女だった。素直にな

れなくて、厳しいことばかり言って、一人で泣いていた。上手く人と仲良くできない。本当は仲良くなりたいのに、怖がられる。いや、仲良くなるのが怖くて、自分から遠ざけてしまう。それが今の自分とそっくりで。

でも、彼女は救われた。あたたかい友に囲まれていたから。彼らは彼女を理解し、迎えてくれた。

夢の中で、自分が死にゆくその時、思ったこと。

「伝えたかった……！　守りたかった……！　もっと、一緒に……！　もっと、強くなりたい……！」

胸に突き刺さっていた夢の中の自分の想いを、竹刀を振るごとに、吐き出す。

何時の間にか由姫の白い肌には汗が幾筋も流れ、その中には別の塩辛いものも混じっていた。息も荒くなっている。

「は、私ったら、何をしているのかしら。馬鹿ね、たかが夢のことなのに、練習に全然集中できてないじゃない」

目から零れおちる水分を、汗と一緒に袖で拭う。

たかが夢。今、自分が苦しんでいるのは、自分自身が作り出した、夢。

「集中、しなくちゃ」

由姫は竹刀を振り続ける。

＊＊＊＊＊＊

本田可奈（ほんだかな）は、塾から家までの道を歩いていた。

時刻は午後九時四十五分。何もない高校生が出歩いている時間ではないが、塾帰りの時間としてはまあ普通であろう。

可奈は高校入学と同時に、塾に行かされるようになった。まだ三ヶ月程だが、友達もできて、塾の雰囲気には大分慣れてきた。

昨夜は珍しく風邪をひいて熱を出し、変な夢も見た。ファンタジーなその世界で、自分はお姫様の乳母だった。どうせ夢を見るのなら、自分をお姫様にすればいいのに、と心底思う。自分の夢なのに、脇役すぎだ。

その乳母の人生を夢で見たのだが、見た覚えのないことまで、今までにないほどはっきり思い出せるのが不思議ではあるが、どうでもいいのであまり深く考えていない。

風邪は今日の午前中には治り、結果として日曜日であるのにも関わらずある、塾の授業は休めなかった。どうせならもう少し風邪が長引いてくれていたら、と思う。

駅前の大通りに出た。ここから家まではあと五分位の距離だ。早く家に着いて、涼しいクーラーの効いた部屋に入りたい。肌が汗ばんで気持ち悪かった。周りを歩く帰宅途中のサラリーマンやＯＬや学生も、同じ思いなのだろう。歩くスピードが早い。

可奈も歩くスピードを上げた直後、背中から声がかかった。

「すみません、道を教えてくれませんかー？」

振り返ってみると、声の出どころは同い年位の少年だった。彼は可奈一人に尋ねた訳ではないらしく、同じセリフを何度も大声で繰り返していた。

しかし可奈以外の通行人の中には、立ち止まる者はいないようだった。

「なに、皆冷たいわね」

仕方なく、可奈はその少年に声をかけることにした。

「どこに行きたいの？」

可奈が尋ねると、少年は少し驚いたような顔をした。しかしすぐに笑顔になって、近くのコンビニを教えてほしいと伝える。

「最近この辺りに引っ越して来てさ、迷子になっちゃったんだ」

少年は恥ずかしそうに頭をかきながら言った。

「それなら、この通りをまっすぐ行って、交差点で左に曲がったらすぐのところにあるわ」

「ありがとう」
「どういたしまして」
可奈が教えてやると、少年は礼を言って言われた通りの方向へと立ち去った。
可奈も、蒸し暑さを思い出したように、再び家へ向かって歩きだす。やがて大通りを外れ、人気のない細い道に入った。もう家は目と鼻の先だ。
しかし、早足で最後の曲がり角を曲がった瞬間、可奈は何かにぶつかり、尻餅をついた。
「……ったー」
「大丈夫？」
ぶつかったのは人だった。差し出された手を握り、視線を上げて相手の顔を見て驚く。
「あなた、さっきの……なんで」
それはさっき可奈が道を教えてやった少年。
「ふふ、ふはは……ぷははっ」
彼は可奈の驚いた顔を見て、笑いだした。
「何が可笑しいの？」
可奈は不愉快になった。会ったばかりの人間に、笑われたくない。
「ふ、いや、さ。君がさっきから自分が日本語喋ってないのに、気づいてないみたいだから。ぷふっ」
「は……？」
「じゃあ今僕が喋ってるのは、日本語か？」
「……！」
今まで無意識に聞いたり喋ってたりしていたが、意識して聞いてみれば、少年の口から吐き出される言葉は、日本語とは全く違う言語だった。英語でも中国語でもフランス語でもない、知らない言語だ。
「なんで……理解できるの？」
英語でさえ苦手でリスニングなんて全くできないのに。

「君みたいな馬鹿は、こんな単純な作戦にも引っかかってくれるんだね。初めて試したけど、意外と使えるな、“マリラクチュア語で話しかけてみる作戦”」
「引っかける？　ま、マリラクチュア？」
何処か外国の名前だろうか、“可奈”は学校で習った覚えがなかった。だが、どこか懐かしい響き。
「あ、夢……」
昨夜見た夢の世界の大陸の名が、確か、マリラクチュア。
「ん。そうそう。ここまで聞いたら、もういいね。君は確実にマリラクチュアの転生者だ。はい、確認作業、終わりっ！」
「……は？　何言って……」
訳の分からないことを言い出す少年に、可奈が答えを聞くことは無かった。
一瞬、光が煌めいたかと思ったが最後、可奈の意識は吸い取られるように無くなる。
人気のない夜の住宅街の道に残されたのは、気味悪く笑う一人の少年と、血だまりの中に浮かぶ一体の死体。
「やっぱり、まだ気づく前の奴を殺すの簡単だなぁ……」
薄い唇を釣り上げ、笑う。
「さて、君はアタリかな？　それともハズレかな？」
少年は、呪文を呟き始めた。

＊＊＊＊＊＊

第七話

翌朝、絢斗は十二個目の目覚まし時計が鳴りだしたところで目が覚めた。

大合唱している様々な種類の目覚まし時計を一つずつ、黙らせていく。時間差で全部で十五個ある目覚まし時計が次から次に鳴りだすようにセットしてある。十二個目を大人しくさせたと思ったら、十三個目が鳴りだした。

「にゃろっ」

十三個目のボタンもＯＦＦにし、まだ鳴りだしていない残り二つにも先手をとる。

ようやく十五個全てが静かになったのは、午前六時半。七時からの朝練に行くために、朝の苦手な絢斗が起きられる限界の時間だ。

「ねむ……」

目をこすりながら、絢斗は制服のシャツに腕を通す。ボタンは全て閉めず、首元はだらしなく開けたまま。どうも全部閉めると息が詰まるのだ。

黒のズボンを履き、ベルトを閉めたところで着替えは終了する。

「アヤくーん、早く降りて来ないと朝練に間に合わないわよー！」

慌てて時間割をしていると、階下からの母親の叫ぶ声が絢斗を急かす。

「わかってるよ！　よっ、と……むう。布団が……ぐ」

教科書やら体操着やらを無理やり詰め込んだリュックサックを片側だけ背負う。絢斗はつい見てしまった柔らかな布団と枕のオーラに負けそうになりながら、なんとか堪えて部屋を出た。ここでこの誘惑に負ければ、朝練どころか、昼まで二度寝すること間違いなしだ。そんな絢斗が首を振って階段を降りようと足を踏み出したその時。

「うきゃあああああ？」

「な、何だ？　美波か？」
遠くから美波の叫び声が飛んできた。急いで階段を降りて一階へと向かう。
「うきゃ、うきぃぃ……」
美波の涙ぐむ声を頼りに、ダイニングへと辿りついた。
「どした。サルみたいな声出して……」
絢斗は廊下とダイニングの境目に座りこんだ妹から視線を上げ、ふと、ダイニングテーブルに乗った物体を目にした。
「んだこれっ！」
その物体は一応皿に乗っていた。お決まりの、アレだ。
「あらぁ、アヤくんもおはよう。今日はね、ミナちゃんがお寝坊さんだったから、お母さん、作ってみたの。フレンチトーストよ。凄いでしょ」
キッチンから聞こえてくる声はもちろん、母、紗綾。真っ黒になったエプロンをゴミ箱に投げ入れていた。
「ふ、ふれ……？」
明らかに、それはフレンチトーストではなかった。即ち、見た目が大丈夫だったあのハンバーグは、奇跡の作品だったのだ。今、皿の上にあるのは、どろりとした緑色の離乳食のような物体が、食パン形に盛られたもの。
「何で緑色になる訳……？」
「ごめん、お兄ちゃん。わたしが昨日遅くまで漫画読んでたせいだぁ」
美波は自分の朝寝坊を嘆いた。
「仕方ない、食う」
「げ、お兄ちゃん、食べるの？」
信じられない、と美波は目を丸くした。
「出されたものは食べないと……ちなみに母さん、どうやって作った、これ？」
絢斗は作ってもらったものは食べるという信念のもとに、フレン

チトーストのくせに用意されていたスプーンを握ったが、これだけは食べる前に聞いておきたかった。心の準備というものだ。
「うん？　卵と砂糖と……」
「……うん、それから？」
この緑色は何だ。
「ピーマンとかほうれん草とか、あとゴーヤと、キウイとメロンでしょー、岩のりに、ワカメにー、あ、歯磨き粉とか！」
一部食材ではなかったが、他、緑の食材多数。
「何でそんなにいれちゃうの……」
次々と挙げられていく食材とフレンチトーストのミスマッチに、つい美波は呟いてしまう。常人には考えつかないレシピだ。
「で、それを全部ミキサーにかけて、出来た液に細かく千切った食パンを入れて、煮込んだわ。二時間」
「うぇ……」
そして完成したのがこの離乳食だ。もうそれはフレンチトーストではない。
チーン。
「美波っ？」
絢斗は突然のオーブントースターの音に驚いた。何時の間にか妹はキッチンにいた。
「はい、これだけでごめんだけど、お兄ちゃんもこれ食べて。お腹壊すよ」
そう言って絢斗の緑色の物体の皿の横に置かれた皿には、こんがりと焼けた食パンが一枚。香ばしい香りと、まともな見た目が、すぐ隣の皿とはまるで別世界のもののように思えた。
「ぐ……美波」
絢斗は数秒考えて、決心する。
「なに？」
「俺のにマーガリン塗っといて」
「は？　そんなの自分でーーってお兄ちゃん？」

絢斗は美波の返事も聞かず、緑色の離乳食の攻略に取りかかったのだ。とろみのある緑色は、食事中には見たくもないシロモノであるのに、それを口にし運んでいる。
「うぇ、おえ……はぐっ。ごほ…」
慣れているはずの母の料理に咳き込む。それは今までのどの料理よりもマズかった。紗綾は別の方向に進化しているらしかった。
そして自分の皿を空にしたあと、絢斗は美波の皿も引き寄せる。
「わたしの分までっ？」
「もぎゅ」
二皿めも物凄いスピードで腹に納めると、絢斗はマーガリンを塗り終えたトーストにかぶりついた。
「っはーうめー！」
単なるトーストがここまで美味しいと感じたのは初めてだ。絢斗は口の中の緑色の味をかき消すようにトーストを食べていく。
「お兄ちゃん、偉いよ……」
その兄の勇姿に、美波は尊敬の念をおくった。
「あらあら、アヤくん、ミナちゃんの分まで食べちゃってー。ミナちゃん、お母さんの分分けてあげよっか？　すっごく美味しいわよ」
紗綾が自分の緑色の物体を美味しそうに食べながら美波に勧めてくる。ダメだ。この人の味覚はぶっ壊れている。
「ううん。わたしはトーストあるから」
美波は引きつった笑顔でハッキリと断った。
「ごちそうさま」
絢斗は緑色の物体二皿、トースト一枚を食べ終え、皿を持って席を立った。もう出ないと朝練に遅れてしまう。学校までは、自転車で近道を通って全速力でこいでも、五分はかかる。
ちょうどその時だった。テーブルに置きっぱなしだった絢斗の携帯が鳴り出す。
「お兄ちゃん電話だよ」
「ん。誰だよこんな朝っぱらから……」

急いでいた絢斗はいらいらしながら携帯を受け取る。折りたたみ式の携帯を開いて画面を確認すると、クラスメイトの名前が表示されていた。絢斗は通話ボタンを押し、電話にでる。
『もしもし？　眠り姫、起きてたか？　野道（のみち）だけど』
「起きてたよ。翔太（しょうた）、なんの用だよ」
電話をかけてきたのは出席番号が絢斗のすぐ前の、野道翔太だった。特につるんでいるわけではないが、体育では同じチームになったりして、どちらかといえば仲の良い奴だ。
『決まってるだろ、連絡網だって。今日は臨時休校だから。出席番号順に回してるからさ、お前も回せよ』
「連絡網？　何の？」
臨時休校といえば台風が接近した時くらいなのだが、外は晴天である。絢斗には全く検討がつかなかった。
『ニュースみてねーの？　説明面倒だな。今すぐつけてみろ。どのニュースでもやってっからさ』
「は？」
『いいからっ！』
「はいはい」
野道に言われ、絢斗はリモコンでテレビの電源を入れた。ニュースを放送しているチャンネルに合わせると、真面目な顔をしたアナウンサーが低い声で原稿を読み上げていた。
『……県、Z市において、今朝高校生の男女三人が遺体で発見されました。被害者は……』
「……ッこれって！」
絢斗は耳を疑った。顔写真が出された被害者の一人は、見覚えのある顔だった。同じ高校の生徒だ。
『ああ。学校の周辺、お前にとったら近所だな、で連続殺人事件が起こってるってことだよ。うちの学校の奴も一人殺られたから、臨時休校、だ』
電話の向こうの、野道の声が遠くに思えた。

『……被害者には目立った共通点は無く、犯行が似ていたことから、警察は同一犯による無差別殺人の線もあるとして捜査を進めています……』
アナウンサーが、犯人はまだ特定されていないことを暗に伝える。
『じゃ、伝えたからな。次に連絡よろしく。お前も一人で出歩くなよ、じゃあな』
「……おう。じゃ」
野道との通話が切れると、絢斗は力が抜けたように椅子に座り込んだ。
「お兄ちゃん、このニュースって……」
美波と紗綾が心配そうにニュースを見ていた。
「この辺で起こってる殺人事件に、うちの学校の奴も巻き込まれたらしい。それで、今日は臨時休校だって」
「三人も……亡くなってるのね。早く解決すればいいけど。アヤくん、当分一人で出かけちゃダメよ。ミナちゃんも」
口の周りについた緑色の物体が緊張感を失わせるが、紗綾は真面目な顔をして言った。兄妹も頷く。
絢斗は連絡網を回すため、テレビを消して次のクラスメイトに電話をかけ、美波と紗綾は再び朝食を再開した。
絢斗の話し声と、食事をする音が静まった部屋に響いた。
数分後、連絡を終えた絢斗は、携帯を閉じて机に放り出した。
「ねえ、亡くなった人ってアヤくんのお友達？」
疲れた様子で机に突っ伏す絢斗に、紗綾が問う。
「いや、同じ学年で顔は知ってるけど、クラスが違うし、喋ったこともない人」
それでも、同じ学校の生徒が死んだというのは、初めての経験で、嫌な気分だった。
「そう。たまたまかもしれないけど、さっきの被害者の三人、皆高校一年生だったわね」
「そういえば、そうだった気もするけど……」

犯人が、襲う相手の歳を特定して殺人を犯すとは思えない。偶然だろうと絢斗は思った。
「それにしてもお兄ちゃん、ギリギリ行く前で良かったね」
美波が笑顔を作って言う。
「そうだな、もう少し早かったら無駄足に……あ！」
「どしたの？」
急に大きな声を出した絢斗に、美波は驚いた顔をした。
「……由姫」
同じ朝練のある由姫は、携帯を持っていない。由姫は絢斗より早く家を出ているだろう。
「朝だし、大丈夫だとは思うけど……ちょっと行ってくる」
「え、ちょっと、お兄ちゃんっ？　もしかしたらまだ……！」
美波の制止も聞かず、絢斗は自転車の鍵だけ持って、走って玄関を出た。

第八話

「もう学校休みって気づいて帰ってる途中かもな」
朝でも熱気が体を包み、蝉のオーケストラが鳴り響く中、絢斗は周りの景色が認識できるギリギリの速さで自転車をこいでいた。流れていく近所の家や商店街に目を凝らし、由姫の姿を探る。その肌には幾筋もの汗が流れていた。
由姫のいつも登校に使っている道は知っている。由姫は母親と自転車を共用しているので、母親のパート勤務のある週の半分、月水金は徒歩で通学している。絢斗は何度ももう一台自転車を買えと言っているのだが、学校は近いし、ちょうどいい運動になるからと、由姫は歩いていた。
学校は徒歩十五分程度の距離。今日は月曜日で、由姫は徒歩の日だから、まだ家には戻れていないだろうと絢斗は踏んでいた。
しかしいくら学校に近づいても、一向に帰宅途中の由姫は見つけられない。とうとう閉じられた校門の前に着いても、由姫の姿は無かった。
「姫野、今日は休みだぞ」
気づかずに来てしまった生徒を追い返すために門の前に立っていた、体格のいい日に焼けた体育教師が、絢斗の姿を見て言った。
「知ってます。一の四の白崎、来てませんか？　あいつ多分知らずに登校したと思うんで、俺迎えに来たんスけど」
絢斗が尋ねると、体育教師はしばらく考えてから首を横に振った。
「それで来たのか。いや、白崎は来てないよ」
「そうですか……」
偶然違う道を通ったとか、十分気をつけたはずだが絢斗が見つけ損ねたとか、行き違いになった可能性は十分にある。がしかし、由姫なら大丈夫と思っていても、近くで殺人事件があったとなると次第に不安が小さな波となって押し寄せてくる。

「来たらお前の家に連絡いれてやるから、早く帰りなさい。男だからって安全じゃ……あ」
「……へ？」
教師の言葉が絢斗の背後へと視線を移したところで止まった。不思議に思った絢斗は、思わず気の抜けた返事をしてしまう。
「アヤ、何をしているの。馬鹿ね」
「！」
聞き慣れた声が飛んできた後ろを振り返ると、そこには制服姿で自転車にまたがった由姫がいた。いつもなら膝下丈のプリーツスカートも、サドルに座っているせいか、由姫の白い膝小僧が見える程度にめくれているし、赤いカチューシャをつけた髪は乱れ、汗びっしょりである。
「由姫！　俺、由姫を迎えに来たんだけど……あれ、自転車？　歩きじゃねえの？」
「ミナちゃんがうちに飛んできて、馬鹿兄貴が確認もしないうちに出て行ったって言うから、わざわざ自転車で迎えに来てあげたのよ。お母さんはまだ使わないから。貴方、携帯も忘れていったそうじゃない」
そう言う由姫の手には、絢斗の青い携帯電話が握られていた。由姫はそれを見せびらかすように振る。
「じゃ、なに。もともと休みって知ってて、出かけてなかったわけ？」
「そうよ。私のところには六時十五分には連絡網が回ってきたから。出かける寸前だったけれど」
つまり、由姫は自宅にずっといたのだ。それを絢斗は早とちりして、迎えに行ったところを、逆に由姫に迎えに来られてしまったというわけだ。
「んだよ。っはー心配して損したぁ」
「ふん、馬鹿ね」
脱力する絢斗に、由姫は小馬鹿にしたような視線を向けた。

「いやいや、普通はさ、『でも、迎えに来ようとしてくれてありがとう』とか言うんじゃね？」
「どうして馬鹿に感謝しなくてはならないの？　ふん、ドラマの見過ぎよ」
そう切り返す由姫は本当に可愛げのない奴だと、由姫が急いで追いかけて来てくれたことも忘れて、絢斗は心底思った。言い返そうと絢斗は口を開く。
しかし、いつまでも校門前で居られては困ると、体育教師の少々イラついた声がそれを止めた。
「いい加減にしろ。早く家に帰りなさい」
「……す、すみません」
「申し訳ありません、先生。この馬鹿はすぐに私が安全に家に送り届けますので」
「いっ……」
由姫が「貴方のせいで私まで怒られたじゃない」と小声で言い、教師からは見えない位置から足を蹴ってくる。
絢斗はすぐさま自転車を帰りの方向へ向け、逃げるようにこぎ出した。さようなら、と教師に別れの挨拶をする由姫の声が背後からしたと思ったら、数秒後には絢斗のすぐ後ろまで来ていた。早い。
「早っ」
「ふん、貴方が遅いのよ。私が後ろを走って貴方に合わせてあげるわ」
縦に並んで走る。流れる帰りの景色は止まって見えた。夏の風は生ぬるい。が、頬を撫でるその風は不思議と気持ちが良かった。
二人は駅前の商店街に入る。行きは由姫を探すことだけを考えていたので絢斗は気がつかなかったが、殺人事件の影響か、いつもより人通りは少ない。
「人、少ねえな」
「……」
「由姫？　……何してんの？」

返事がないと思ったら、由姫は少し前に通り過ぎた喫茶店の前で自転車を停めていた。すぐにUターンして、絢斗もその喫茶店の前に自転車を停める。その時には既に由姫は店内に入ってしまっていた。

「ちょ、由姫？　早く帰らねえと……」

絢斗の制止を黙殺し、由姫は店員に案内されて窓際の席に座る。追って店内に入った絢斗も、由姫が絢斗を睨んで机を指で叩いて硬い音を響かせるので、渋々由姫の向かいに座った。

茶色で統一された壁とテーブルを、オレンジ色の照明が照らす。平日の朝ということで、客は出勤前のサラリーマンが多い。高校生の男女二人組というのは明らかに浮いていた。冷房が効きすぎているのか、どこか肌寒い。

「ご注文は」

「アイスコーヒー二つで」

絢斗の意見も聞かず、メニューをちらと見て、由姫は注文した。

「かしこまりました」

注文を取りに来た店員が、店の奥へと消えた。それを見計らって、絢斗は小声で由姫に告げる。

「……なあ、俺財布持ってねえんだけど」

由姫が注文した後に気付いて、絢斗はちょっと焦っていた。由姫が自分を頼りに注文していたら、無銭飲食になってしまう。

「……私のおごりよ。私が勝手に注文したのだから」

絢斗と同じくカバンは持って来ていないが、由姫はきちんとスカートのポケットに財布を入れて持って来ていたようだった。

「……で？　早く家に帰らないといけないこんな時に、真面目なお前が何なんだよ？」

唐突に、絢斗は今こんなところにいる訳を尋ねた。すると、由姫が様子を豹変させる。

「え？　ああ、き、聞いて欲しい話というか、相談が、あ、あるのよ……」

「何？　今じゃないといけねえの？」
いつもはっきりと物を言う由姫だとは思えないくらい、由姫はつまりながら答える。
「早く、聞いてもらいたくて……ゆ、夢の、こと、なのだけれど……」
それだけ言うと、由姫は恥ずかしそうに顔を赤らめて俯いてしまった。膝の上では拳が硬く握られている。
「お待たせ致しました、アイスコーヒーです」
先ほどの店員がアイスコーヒーを二つ盆に載せて戻って来た。絢斗と由姫の前に一つずつ置かれる。
由姫の言葉の続きを待つ絢斗はストローをアイスコーヒーに突き刺し、ガムシロップを垂らし、少しずつ飲み始めるが、由姫は手をつけようともしない。そして、口は閉ざしたまま。
絢斗のコーヒーだけが減っていき、由姫のコーヒーは氷が溶けて若干増えていた。
「あ、あのさ……まだ？」
自分のコーヒーが無くなってついに待ちきれなくなった絢斗は、由姫の話の先を促した。すると、由姫の鋭い目で睨まれる。
「……は、恥ずかしいのよ。内容が、幼稚で……先に何か貴方が話して。その話が終わるまでに、気持ちを整えるから」
そう言って由姫は深呼吸をし始めた。意味不明だ。
「は？　なんだそれ……まあ、いいけど……なんかあったかな、話題」
こんなことは滅多に無いので、付き合ってやることに決める。何の話か悩みか知らないが、とにかく待ってやろうと、最近の記憶から話題になりそうなものを探す。
「あ、そうそう。夢っていや、俺もこの前熱出した時に変わったヤツみたよ。お姫さまとか、魔法とかでてくるファンタジーな」
「……！」
由姫がピクリと整った眉を動かすが、絢斗はそれに気づかないで

続ける。
「なんかさ、めちゃくちゃ覚えてんだよ。俺は“いばらの国”っていう国の王子でさ、毎日すんげえ厳しい教育係の魔女に稽古させられて。そいつ、あ、ティアナっていうんだけど、俺より一つ年上なだけなのに賢くて、魔法も剣も超上手くて……って由姫？」
由姫が目を見開いて自分を見ているのに気付いて、絢斗は驚く。
「……いや、その……続けて。聞かせて」
絢斗はその返事にも驚いた。いつもの由姫なら「ふん、なんて幼稚な夢をみているの、貴方は。夢で自分が王子ですって？　貴方はよっぽどのナルシストね。笑っちゃうわ」くらいの切り返しをしてくるはずだった。
「じゃ、あ、そう言えば由姫によく似た幼なじみも出て来たな。名前は……スノ……」
「……？」
由姫の息を呑む音が聞こえたが、止めたら怒られそうで、気にせずに絢斗は続けた。
「スノウっていって……」
「……？？　……あ、ああっ！」
「で……って、ええっ？」
絢斗がその名を出した途端、由姫は立ち上がり、自分の体を抱き、震え出す。
「え、ちょっと、由姫？　気分悪い？　冷房寒いのか？」
急に大声を出した連れに、周りの客や店員の目が集まる。
「……げ」
さらに、周りの人々から由姫に視線を戻した時には、由姫の淡いピンク色の頬に涙が零れていた。冷たい視線が由姫から自分へと移るのが絢斗には分かった。
「ちょ……店、出よう」
訳のわからないまま、絢斗は由姫の手を引き、由姫の財布からコーヒー代を出してレジに置いて、急いで店の外に出た。

取り敢えず停めてある自転車はそのままで、人気の少ない路地に駆け込む。
「離して。もう、大丈夫だから。ごめんなさい」
絢斗が手を離してやると、由姫は開放された右手で涙を拭った。すると涙を流していたのが嘘のように、その目には鋭い光が宿った。
「何だよ、急に！　びっくりするし、俺が泣かしたみたいで超恥ずかしいんだけど！」
おそらく初めて見た由姫の涙に狼狽していた絢斗だったが、涙の消えた由姫の目にいつもの雰囲気を感じ取って苦情をつけた。
「それは悪かったと思っているわ。ふ、ふふっ。面白いわね。さっきは驚いてつい感情が昂ぶってしまったけれど……こんなことに、なっているなんて、信じられない。でも、私は分かったわ。貴方に相談して良かった。まさか貴方から聞かされるとは思ってなかったけれど」
「は？」
泣いたと思ったら笑いだした由姫に、絢斗は戸惑う。何か、おかしい。
「ねえ。貴方はその夢の中で私に似た幼なじみがスノウという名だと言ったわ。それは“鏡の国”の“プリンセス”、スノウ・マリー・ディアスクラではないかしら？」
「……？」
確かにそうだった。どうして、由姫が自分の夢の登場人物の名を知っているのか。
「そして、貴方の名前は……」
絢斗の、夢の中の自分。そう、彼はこう呼ばれていた。
「ローズ」
由姫は問いかける。
「貴方は“いばらの国”の王子、ローズ・ウィル・シャルスでしょう？」

第九話

＊＊＊＊＊＊

「ふぁあ。眠いな。今日もあっちの奴、見つかるかな」
一晩で三人の血を浴びた少年は、駅前をぶらつき、今日も獲物を探していた。昨夜殺したのは皆ハズレ。ターゲットは中々見つからない。それでも数を打てば当たる、と少年は今日も殺す気満々で家を出た。
警察は怖くなかった。魔法（ちから）があれば、信じない大人の目を掻い潜ることなど大したことではない。魔法はある程度得意であった。
実際、少年は何も誰にも気づかれることなく家で眠り、学校が休校になったのを良いことに、朝から狩りに出かけた。
狙うのは五人。五人の“姫”。
少年は獲物のこの世界での姿形や名を知っている訳ではない。手がかりは無いに等しい。しかしそれは他の暗殺者も、同じ。
自分は誰よりも早く、一人でも多く、アレをあの人に送らなければならない。
そのためなら、この世界で犯罪を犯しても何も感じなかった。本当の自分の為に、帰る為に、しなければならないのだから。こんな偽物の世界の住人を殺したって構わない。紛れ込んだ“姫”を殺す為なら、仕方のない犠牲だ。
少年は本気でそう思っていた。
「早くしないと。そろそろ……気付いた奴も出て来てるかもな」
自らの正体に。その魂の元あったところに。
気付いた奴は、昨夜のまだ何も知らない奴らよりずっと殺し難いはずだ。魔法を使えることを、知っている。
さらに、自分と同じように、周りの人々を殺そうとする奴らもど

んどん出てくるはずだ。そうなれば、自分の命も安全ではない。
自分が何番目なのかはわからない。一つだけ言えるのは、行動は早ければ早いほど有利だということ。
少年は商店街の方へと歩いた。辺りを見渡しても、昨日自分が起こした事件のせいか、人が少ない。
それでも根気よく、少年は歩く。鼻歌を歌いながら、気の向くままに。獲物に、出会うことを願いながら。
適当に道を選んでいたら、気がつくと人気が更に少ない細い路地まで来てしまっていた。引き返そうと振り返ると、路地の入り口に、若い男女が駆け込んで来るのが見えた。
遠いが、少年はその二人が制服を着ている学生であることを知る。普通ならば授業があるはずのこの時間に出歩いているとなれば、自分と同じくこの辺りの高校に通っていて、臨時休校になっている高校生だろう。この市内の高校は今日は全校休校になっていると聞いている。
「のん気にデート中か？　ラッキー。獲物だ。またあの言葉で話かけてみよ」
少年は舌舐めずりし、ニヤリと口を歪めた。

＊＊＊＊＊

「そうでしょう？　ローズ？」
由姫がジリジリと詰め寄る。その迫力に、絢斗は圧される。
「な、何だよ、急にっ！」
背中に硬い感触。塀に阻まれ、これ以上後退できないことを示していた。
ローズ・ウィル・シャルス。確かに、それは夢の中の自分の名前。そして、由姫に似ていると言ったスノウの正式な名は、スノウ・マ

リー・ディアスクラ。単なる夢の住人だと思っていた人物の名が、今現実の由姫の口から出てきた。これが意味することが、絢斗には理解出来ない。
「わからなくてもいいから、とにかく返事をして」
いらいらとした様子で由姫が急かす。
「……っ。ああ、そうだよ。俺の夢の中での名前はローズだ」
「そう。やっぱりね」
由姫は納得したように頷いた。
「はあ？　返事したんだから俺にもわかるように説明しろよ。何で俺の――」
「夢を知っているか？　決まっているじゃない。私も同じ夢――いいえ、同じ時の同じ世界の夢をみたから」
「？」
由姫は絢斗の目をしっかりと見据えて言う。絢斗の頭上には相変わらずクエスチョンマークが浮かんでいたが、気にせず説明を続けた。
「貴方と私がみた夢。あれはただの夢ではないのよ。ここは違う世界ではあるけれど、実際に存在している」
「ん、んん？」
絢斗には由姫の言っていることがますます分からなくなってきていた。その様子に、由姫がいらいらしだす。
「まだわからない？　私が思うに、あの夢は――前世。私たちの前世の記憶なの」
「……？　由姫、頭大丈夫か？」
前世という言葉より、それを由姫が言ったということに驚く絢斗。その反応に、当然由姫は思いっきり顔を顰める。
「私は真面目に話をしてるのよ？」
「いや、だって。たまたま同じような夢みただけとか……昔一緒にみた洋画を一緒に夢みたとかさ、もっと現実的な」
いくらなんでも由姫の考えは飛躍し過ぎだと絢斗は思った。確か

に、夢の中の知識が一致しているのは不思議ではあるが――これまで十六年間も共に過ごして来たのだ。どこかで一緒に仕入れた知識が偶然同時に夢に現れた可能性も無くはない。
「信じないのね。いいわ。証明してあげる」
しかし、メルヘンから最も遠い存在だと思っていた由姫は引き下がらない。証明するとまで言う。
「私を殴りなさい。アヤ」
「は？　お前いつからMになっ」
「言葉で言って分からないのなら、見せてあげるわ」
絢斗を見上げる由姫の眼光には有無を言わせぬ力があった。こうなっては由姫は頑として譲らないのはよく知っている。絢斗は仕方なく、由姫の狂言に付き合ってやることに決めた。
「じ、じゃあ」
由姫の意図は分からないまま、絢斗は右手を握りしめる。軽く風を切る音がして、拳は一直線に由姫へと向かい、そのまま軽く由姫の肩に当たる、はずだった。
「あ、れ……？」
硬い衝撃。当たったと思ったその拳は、由姫には届いていなかった。由姫の周りに何時の間にか張り巡らされた青白い光の膜が、それを阻んでいる。
「私、いいえ、スノウが唯一使えた、魔法よ」
「ま、魔法って……！」
光に触れた右手を何度も見直す。その手には硬いものにぶつかった感触が確かに残っていた。
それは絢斗、いやローズもよく知っている魔法。あの世界のもの。
「それじゃ、本当に……？」
夢だと思っていたものが、急に現実味を帯びてくる。それは不自然な夢が現実になる瞬間。
「マリラクチュア魔法第二番、『壁』……そんな、まさか……」
確かめるように、由姫の周りの硬い光に、その名を呼びながらも

う一度触れる。その光は確かに存在しており、同じ感触を絢斗の手のひらに感じさせた。

「そう。私たちは――確かに存在していた。生きていたのよ」

それは――生きて、そして死んだ証。

第十話

「これでわかったでしょう？　前世という話なら、この魔法を説明できる」
　由姫は静かに光を消した。
「そ、んな……ことがあるのか」
　震える身体を抱いてしゃがみ込んだ絢斗に、記憶が巡る。偽物だと思っていた、その記憶が現実にあったものだったとしたら。この記憶の中の自分の想いも、それは確かにあったもの。
　様々なこの思い出は、このかけがえのないものはまだ、消えていない。まだ、この世にあって、生きている。
　ずっと絢斗に受け入れられていなかったものが、急に溶けるかのように、絢斗の心に染み渡っていた。
「生きてるんだ」
　記憶の最後を、最期の瞬間を思い出して、確かめるように呟く。こうして息をしていることが、胸の中で心臓が確かに動いていることが、不思議なことのように思えた。それは、十六歳の少年にはないはずの想い。
　由姫はその絢斗の僅かな変化に気付いた。
「駄目よ、アヤ。貴方はアヤ。ローズじゃない。これだけは忘れないで」
「え？」
　顔を上げた絢斗の顔はいつもの表情ではなかった。
「私たちはただ、少し昔の記憶を持っているだけ。それは確かに大切なものよ。だけれど、私は白崎由姫。スノウじゃないわ。貴方なのよ、アヤ。今生きているのは、姫野絢斗なの」
　そう語る由姫の唇は乾き、振るえていた。しかししっかりとした声で、続ける。
「私も、貴方がスノウという名を言うのを聞いて、この記憶は

前世のものだと気付いた時、驚いたわ。動揺もした。だって、だって、私は死んでしまったのだもの！　もう、居ないの、自分の存在が。そのことに気付いてしまった。単なる夢だと思えていた時の方が楽だったわ。でもね――」

すっ、と深く息を吸う。

「今、私は生きているの。白崎由姫はまだ生きているの。それは貴方も同じでしょう？　忘れなければならないの、終わらせなければならないの」

由姫が見せるのは決意の表情。しかし、そうしたくないのは他でもない、由姫であることに、由姫自身は気付いていない。

「由姫……ごめん」

謝る声の調子は、いつもの絢斗のものだった。

「生きているのは今は俺。ローズはもう死んでる。だから俺たちはこのままで生きていくべき。そういうことだよな」

立ち上がった絢斗が確認するように見せた微笑みに、由姫も少し微笑んで頷いた。

「俺、さ。前世ってもっと――別人で、生まれ変わったら、何で俺はここにいるんだ？　とかなって、大人の精神が子供の中に入っているというか、そんな感じだと思ってた」

塀に背中を預け、空を見る。由姫も絢斗に倣う。

「そうね。スノウという人格が、記憶を取り戻した瞬間に私を乗っ取ったとか、そういうことではないわね。スノウとして生きていたのも、私。そのままなのね。ただ、昔のことを思い出しただけのように」

空は青く、夏の雲はゆっくりと動いていた。暑い空気を薙ぎ払うように、心地よい風が並んだ二人を撫でる。

「俺たちの人生の歴史には紀元前がある、みたいな？」

絢斗が言うと、由姫はぷっと吹き出した。

「ふっ、貴方今上手いこと言ったと思ったでしょう」

「な……！」

クスクスと笑う由姫の澄み切った声が誰もいない路地に響く。絢斗の耳は少し赤くなり、拗ねたように口を尖らせた。
「けっ。珍しくメソメソ泣くから……ってぇなっ！」
不満を口にすると、由姫に耳を思い切り引っ張られる。違う意味で、絢斗の右耳はさらに赤くなった。
「泣いてなんかいないわ。そこは間違えないで」
絢斗なヒリヒリと痛む耳をさする。
「はいはい。話戻すぞ。上手く言ったとかじゃなくて、つまりだな、俺が言いたいのは、無理に過去のことを忘れようとしなくてもいいんじゃねえかってこと」
「はあ？　今忘れようって話になったところじゃないの」
何を言い出すんだ、と由姫の眉が釣り上がる。
「別に害があるわけじゃないし。それに、ローズは俺だ。別の誰かじゃない。その記憶を忘れるってことは、ローズを殺すことと同じじゃねえか？」
「……」
もっともな、絢斗の指摘。
「由姫も、嫌なんだろ？　大切なんだろ？　スノウの時の気持ちも、記憶も。簡単に切り捨てられないんだったら、大切にしまっておけばいい。由姫として生きていく中で、さ」
せっかくまだ、生きているんだから。そう心の中で付け加える。
「……そういう考え方も、あるのかもしれないわね。私、死んだらもう存在しているべきではないと思っていたわ」
由姫は絢斗を見ることなく、視線を空に向けたまま言う。その顔はどこか清々しかった。
「そういえば、なんで俺たち、死んだんだっけ？」
「え？」
今度はキョトンとした顔を絢斗に向けた。
「最後の方の記憶が曖昧でさ、誰かに刺された気がするんだけど、それがなんでなのかとか覚えてねえ」

「……私の最後の記憶は凄く眩しい光を浴びたところで途切れているわ」
数秒の、間。
「ご、ごめん、変なこと言って。ま、こんなこと考えなくてもいっか」
気まずくなった雰囲気を掻き消すように、作り笑いを浮かべ、頭を掻く絢斗。
「そ、そうね。気にせず今まで通り……」
それに由姫が同意し、同じように作り笑いを浮かべた、刹那。
「いやあああああぁぁぁぁぁ？」
「？」
「何？」
女の叫び声が路地中に響き渡る。しかし、周りには人一人居らず、その声に反応したのは絢斗と由姫の二人だけのようだった。
「なんかあったのか？　って由姫？」
絢斗が気付いた時には、由姫は走り出していた。
「こういうときはまずは警察だろうが？　バカ！」
すぐに見えなくなってしまった由姫に悪態をつきながら、ズボンのポケットを探る。が、指に触れるのは携帯の硬いプラスチックではなく、ポケットの裏地の生地だった。
「――っ？　俺の携帯由姫が持ったままだ！」
まだ、返してもらっていなかったことに気づく。
「クソっ？」
地面を蹴り、絢斗は由姫のあとを追った。
この時はまだ知らなかった。前世から、自らの意志では逃れられないことに。

第十一話

「警察なんて、呼んでいる暇はないでしょう」
事態の緊急性を感じた由姫は、後ろから飛んでくる絢斗の制止を無視する。悲鳴は近かった。大体の検討をつけて走る。
自分が助けになるかどうかはわからないが、人が来れば襲っている者は逃げるかもしれない。危険は承知で由姫は警察は絢斗に任せて自分は駆けつけることを選んだ。絢斗の携帯が自分のポケットに入っていることは忘れていたが。そういう無鉄砲なところが、由姫にはあった。
入り組んだ路地の筋を一つ一つ確認していく。四つ目の角を曲がった、その時。
「きゃあっ！」
「……？」
悲鳴と共に突然目の前に現れた人物にぶつかって押し倒され、衝撃に一瞬息が詰まる。
揺れた視界の中で拾った、由姫の上に倒れこんで来た者の姿は、同年代の少女だった。
「た、助け、て……」
ぶつかったことを謝るでもなく、目を腫らして涙を流す彼女は、由姫に助けを求めた。
「ど、どうしたの？　さっきの悲鳴も貴方？　助けてあげるから、ちょっとどいてく……？」
動揺しながらも由姫が尋ねるが、それきり少女は動かなかった。返事の代わりに、生温かいものが、由姫の胸を濡らす。
「いやぁっ！」
腕の力を思い切り使って少女を突き飛ばす。由姫のすぐ横に転がった彼女の首は、もうなかった。

「ひっ……？」
小さな悲鳴をあげ、手をつき、上体だけ起こした由姫は、大量の血だまりから臭う鉄の鼻をつくような臭いを初めて嗅ぐ。吐き気が由姫を襲うが、ぐっと堪える。
「あれま。また目撃者がでちゃったかぁ」
「っ？」
ふいに男の声が死体から目を離せないでいる由姫の頭上から降りかかる。ビクリ、と肩を震わせた由姫が見上げると、すぐそばに少年が立っていた。
銀縁の眼鏡にまだ中学生らしさを感じさせる顔立ちはいかにも優等生といった感じだ。着ているのは、同じ市内にある、進学校として有名な私立高校の制服。しかし、今その制服は血で真っ赤に濡れており、頬にもベッタリと乾いた血がついている。凶器はどこかに隠しもっているのか見当たらないが、それはこの殺人の犯人がだれなのか、由姫に容易に悟らせた。
「あ、あ……」
腰が抜けて、立ち上がれない。少年はにっこりと笑う。
「残念だけどさ。僕記憶を消したり出来ないんだよね。言葉の確認してないけど、目撃者は殺しちゃうしかないし、ちょうど君も高校生みたいだから、もしかしたらターゲットかもしれないわけだし。あ、因みに言っておくけど、この辺り一体は少し前から誰も一時間は入れないようにしてあるからさ、助けはこないよ？　君は偶々封鎖する前に入り込んじゃったみたいだけど、多分もう他には人居ないと思うし」
由姫にはこの少年が何を言っているのか、きちんと理解できなかった。ただ分かるのは、このままいけば自分も殺されるということだけ。
「どっちにしろ、死んでもらうから。じゃあね」
短い、別れの挨拶。それは由姫をこの世から見送るものだった。
由姫はギュッと、目を瞑る。

こういうときは過去の後悔をよくするというが、今の由姫には何も考えられる余裕などなかった。
「……？」
短い破裂音が、由姫の鼓膜を震わせる。
しかし、いつまで経っても身体には何の痛みも、衝撃も感じられない。自分はもう死んだのだろうか。由姫は目を閉じたまま、ただ身を縮ませていた。
由姫の体感時間では何十分にも思えたが、実際はほんの数秒。
やがて、チッ、と舌打ちする音が聞こえる。
「まだ居たのか」
「由姫？」
「？」
続いて背後から、自分の名を叫ぶ声が飛んでくる。ついさっきまで一緒に居たのに、懐かしく思えるのは何故だろうか、それは絢斗の声。
それに反応して目を開けると、目の前は青い光で覆われていた。それは先ほど由姫自身が絢斗にやって見せた、『壁』。目の前で顰め面で立っている少年は、確かに由姫を攻撃したのだろう、今の『壁』には丁度由姫の頭上に大きな亀裂が入っていた。
振り返ると、絢斗が息を切らせて駆け寄ってくる。『壁』はドーム状に由姫を覆っているが、絢斗はその中には居ない。由姫が創り出したものではないから、どうやら絢斗が遠隔操作で『壁』を創り出し、由姫を守ってくれたようだった。
絢斗が『壁』の中に手を突っ込んで動けない由姫の右腕を引っ掴み、自分の来た方へ引き寄せ、少年から少し距離をとる。
『壁』は術者の出入り、他人の中から外への移動は可能である。
由姫がその『壁』から抜け出した途端、亀裂から『壁』は音を立てずに細かい光の粒となって消滅する。
「バカ由姫！　勝手に危険に飛び込むんじゃねぇ！」
「ご、ごめんなさい」

いつになく強い口調で絢斗に叱咤され、今回はさすがに言い返せなかった由姫は素直に謝る。
「バカだな、何で『壁』張らなかったんだ」
しかし、これは癇に障ったらしい。
「き、今日さっき久しぶりに使ったのよ？　そんな馴染みのないものをいきなり実践で使うことなんて思いつかないわよっ！」
大声で言い返したことで取り敢えず放心状態からは抜け出し、脚に力が戻った由姫は『壁』を二人を囲んで張った。それを強化するように、絢斗もその周りにもう一層『壁』を張る。
「それ、マリラクチュアの魔法だね。君たちも、あっちの世界の人だったんだ」
少年が、二人を囲む光を一瞥して言う。明らかな異常を、なんでもないとでもいうように、平然としていた。
「この人、魔法を知って……？」
「さっきお前を襲うのにも、魔法使ってた。ほら、アレ」
絢斗が視線で指し示した少年の手には何時の間にか光の小刀が握られていた。由姫は目を瞑っていた為に知らなかったが、それが由姫の頭上に振り降ろされ、絢斗の『壁』に亀裂をつくったものの正体だった。由姫に助けを求めた少女の首を落とした凶器でもある。
「魔法使ってるってことはもう知ってるんだろ？　僕たちが、異世界からの転生者だってこと」
少年は余裕の表情で語り始める。すぐに襲ってくる様子はない。その様に、今朝のニュースを思い出す。
「まさかお前が、昨日の殺人も……！」
「そうだよ。そこに転がってる女も、向こうに転がってるその彼氏も、僕が殺った。こっちの彼女は転生じゃなかったけど、彼を殺すのを見られたから。ふふ」
あっさりと肯定し、感情のない目で首のない少女の死体を見やり、嗤う。
「んでだよっ！」

その振る舞いに、絢斗は激昂する。
「そりゃあ、しなくちゃならないからだよ。え？　知らないの？」
ニヤ、と気味悪く嗤う少年。
「そっかそっか。もしかして君が――――大当たり？」
「は？」
少年の言っている意味が分からない。問い返すが、少年は嗤うだけで、返事は返さなかった。
「――？」
少年が瞬時に距離を詰める。力の限り手に持っていた小刀を『壁』に突き刺し、更に魔力を練り出し、次々に光の凶器を創り出しては突き刺す。
絢斗と由姫は迎え討つ手段となる魔法を知らない。ただ『壁』を張り続けるしかなかった。少年もそれを知っていたのだろう、余裕の笑みを崩さず、ただ『壁』を攻撃し続ける。
「さっきのはあっさり壊れたけど、守りの大陸と言われるだけあって、やっぱりその守備魔法、なかなか壊れないね」
「さっきのは遠隔魔法だったからな！」
小さな亀裂に新たに魔力を注ぎ、『壁』を保つ。
「でもま、じきに壊れるよ。ほら、上」
自信ありげに長剣を持った右手の指で、上空を指指す。
「な――？」
今まで目の前の攻撃に目を奪われていた二人が気がつかない間に、『壁』の真上には、数え切れない程の光の杭が、浮かんでいた。
「バイバイ」
少年の指が下へ向けられたのと同時に、それは『壁』に降り注ぐ。
「くっ？」
「きゃっ？」
ずん、と重い衝撃をくらうと同時に『壁』に何百もの亀裂が一斉に走る。
「その魔法、マリラクチュア人全員が使える超基本魔法だろ。そん

な下級魔法、ガーゼラ帝国の騎士の僕に、通じる訳ないじゃん」
修復が、間に合わない。新たに『壁』を張っても重い攻撃に、数秒ともたない。
「……っ！　壊れる！」
キラキラと、『壁』が消えていく。
「ごめんなさい、アヤ……私のせいで」
「何言ってんだよっ！　集中しろっ！」
しかし、もう『壁』の命は数秒ともたないのは目に見えていた。
最後の光の『壁』が崩れる。その上から降り注ぐ、大量の光。
それでも諦めまいと、絢斗が再び『壁』を張るが、完成する前に打ち破られる。
終わった。１６歳になったばかりの二人は、そんなことを思った。
シャン、と鈴の音が鳴った。続く、鈍い打撲音。
「ぐあっ！」
少年の呻き声。
先ほどまですぐ近くで二人を嘲笑っていた彼は、５メートル先の地面に突っ伏していた。
「また、助かったの？」
「な、んで――？」
嘘のように光の凶器は消え去り、呆然とする二人に残骸の光の粒が夏の雪のように降りかかっていた。
また、鈴の音が響く。
「うわあああぁぁぁ？」
呼応するように、突如生み出された炎が少年を囲む。すぐさま上昇する周りの温度に驚き立ち上がり、慌てて魔法を使おうとした少年に、今度はなにもないはずの空から大量の水が浴びせられる。
「ぶひゃっ！　助かっ……ぶくうわっわ…ごぽっ！」
降り注ぐ水圧で少年は再び地面に抑えつけられ、息が出来ない。
少年を囲む炎は消えることなく、水は炎の外に出ることなく、炎の柵に触れると蒸発するように全て光の粒に戻って消える。

また、鈴の音。
少年の手足を、地面から生えはじめた光の弦が縛り付ける。指一本動かせないほど弦が巻きついたところで、流水は止まり、炎は全ての水を光に還し終わると、自らも光の粒となって消えた。その頃には少年は気絶しているのか、ぐったりと力無く地面に横たわっていた。
「な、何が起こったの？」
目の前で起きた超常現象のオンパレードに、由姫は目を白黒させていた。自分も魔法を使っていたことは、忘れていた。
何度目になるか、また同じ鈴の音。
気絶した少年を見下ろす、宙に浮いた少女が姿を表した。
「阿形（あがた）君、残念だった」
少年の知り合いなのか、彼女は彼の名を呟き、静かに地面に舞い降りた。スカートのポケットから飛び出すストラップについた鈴が少女が動く度に音を鳴らす。
肩甲骨ほどまで伸びた、栗色に染めた髪を高い位置で縛ったツインテールが揺れる。
少女が猫の様な黒い目を、絢斗と由姫の方へ向けた。
「大丈夫だった？」
そう二人に問いながら、離れた場所にある二つの死体を、どこからともなく現れた光の布で覆う。
「ああ。あんたは俺たちを襲ったりしないな？　そいつのこと、知ってるみたいだけど」
少女が攻撃してくる気配は無かったが、一応確認する。
「彼は私のクラスメイトだというだけ。貴方たちが、彼のように他人を襲ったりしなければ、私は貴方たちに危害を加えるつもりはない」
その証拠だというように指指す少女の着ている制服のブラウスの胸と膝上に短くしたスカートの裾には少年と同じ私立高校のエンブレムが刺繍されていた。

「でも、聞きたいことが幾つかある。答えによっては、相応の処置を施さなければならないから」
「な――」
無表情のまま、彼女は手をこちらに向ける。魔法が飛び出すのかと身構えるが、彼女の細い小さな手は人差し指を一本立てただけだった。
「一つ。貴方たちの名前と学年は？　因みに私の名前は西條有沙（さいじょうありさ）。私立鳩原高校一年」
きちんと自分の名前も告げたうえで問う。有沙の意図は図れなかったが、取り敢えず二人は答える。
「姫野絢斗、県立自由山高校一年」
「私も同じ学校の一年で、白崎由姫よ」
聞いてなんの感想を述べる訳でも無く、有沙は続けて中指を立てる。
「二つ。この女子の死体と、向こうにあった男子の死体はこいつの仕業？　貴方たちはどうして居合わせたの？」
こいつ、と顎で示されたのは先ほど阿形と呼ばれた少年。
これには由姫が答えた。
「そうよ。殺したのはそこの彼。昨夜の殺人も彼がやったと自分で言っていたわ。私たちは偶然近くに居て、悲鳴が聞こえたので私が駆けつけたの。そうしたら、私の目の前で彼女は殺されて――それを目撃した私も襲われたわ。アヤ――彼は私より後に駆けつけたわ」
由姫が口を閉じると、また一本、薬指が追加される。
「三つ。貴方たちは何故助かったの？　私が来る直前に襲われたの？　それにしては、直前に襲われたはずの彼女の血が乾いてる。夏とはいっても、ね」
黒い大きな瞳で、有沙はすぐそばに転がる少女の死体を一瞥する。
「見てないのか？」
絢斗が逆に問い返す。
「何を？　私が阿形君を追ってここに来たのは、貴方たちに沢山の

光の武器が降り注ごうとしている瞬間だった。咄嗟に助けてあげたけど」
　絢斗の問いに、有沙は怪訝そうな表情をみせる。有沙は二人が『壁』を使っていたことを知らないようだ。由姫が口を開く。
「魔法を、使ったのよ。貴方や、そこの阿形とかいう彼と同じように。数分間、それで持ちこたえていたの」
　それを聞き、魔法という単語にも反応することなく、有沙は静かに頷いた。
「分かった。じゃ、最後の質問」
　四本目――小指が立てられる。
「四つ。貴方たちの名前は？」
「は？　それはさっき――」
「アヤは黙っていて」
　絢斗の疑問は由姫の制止によって遮られる。
「それを訊くのなら、貴方もさっきと同じように、先に名乗るのが礼儀ではないかしら？」
　挑戦的な口振りで、由姫が言う。
「それは無理。もし貴方たちが嘘を吐いていたら、自分が危ない」
「ふん、それはこちらも同じことよ」
「……」
　初めて黙り込む有沙。睨み合う有沙と由姫と、一人全く何の話かも分かっておらず取り残されている絢斗。
「なあ由姫、何の話？　名前って？」
「馬鹿。彼女は魔法を使ったという答えの後で、もう一度最初と同じ質問をした。それが意味することが、まだわからないの？」
　由姫が呆れたように言う。
「さっきもこの話したでしょう。前世の名を問うてるのよ、彼女は」
　視線は動かさず、由姫は絢斗に説明し終える。
「ああ。魔法使えたから、か。で、何で答えねぇの？」
「……アヤのお馬鹿」

今度の絢斗の質問に答えたのは有沙だった。
「私たち転生者は、皆が仲間だと言う訳ではないの。阿形君みたいに、人を襲う者もいる。いえ、ある人たちを殺す為に、転生してきた人がほとんど」
「――？」
それを聞いて、絢斗は絶句する。
「私も、その人たちを探してる」
「貴方も、殺す為に？」
由姫が、険しい顔で問う。
しかし、有沙は首を横に振った。
「違う。私は、守る為に。だから貴方たちがその人たちを襲う可能性があるというのなら――前世記憶を消させてもらう」
有沙の左手に、緑色の光が灯る。その光は特徴的な、金平糖の様な形をしていた。
前世の記憶は、大切な生きた証だ。そう簡単に奪われては敵わない。由姫の表情に焦りが生まれる。
「待ちなさい。私たちは人を殺そうだなんて、思っていないわ。そもそも、戦う魔法だって、知らない」
「人を殺す方法なら、いくらでもある。それに、それだって嘘かもしれない訳だし」
「……っ」
何も言い返せない。正体を明かし、それを証明出来なければ、これを覆すことは不可能。しかし、正体を明かすことはこの上なく危険だ。有沙の守ると言っている人物が、自分たちの前世の敵だったら。由姫たちの正体を知った瞬間、間違いなく有沙はスノウとローズの記憶を、消すだろう。このままでは拉致があかない。由姫の額に汗が浮かぶ。
その刹那だった。
「あーーーー？」
「？」

「な、何よ、アヤ？」
突然、絢斗があげた大声に、張り詰めていた空気が一瞬壊される。
「その緑の金平糖、何か見覚えあるし、君も何か懐かしい感じがするなと思ってたら、思い出した？」
「？」
「貴方、この人を知っているの？」
驚いた顔で、二人が絢斗を見上げる。
「ん。多分合ってると思う。さっき使ってた魔法の攻撃パターンとか、その金平糖とか何より――」
絢斗が有沙のツインテールを指を指す。
「その髪型っ！　由姫、味方だ。信頼できる人物だと思う。由姫もよく知ってるはずの」
「は――？」
絢斗は片手を上げ、親しい間柄の友にそうするように、言う。
「よっ、久しぶりだな――ティアナ」
「――――？」
有沙が、目を見開く。
「ティ、アナ……さん？」
その名は、由姫もよく知っている人物の名だった。
「ロ、ローズ王子……？」
有沙の口から、絢斗の前世の名が零れ落ちる。
「そう。こっちは、スノウ」
「スノウ姫……」
視線を、絢斗から由姫へと滑らせる。
「証明して欲しかったら、何か共通の記憶を訊いてくれれば、覚えてる限りは答える。確認が必要だろ？」
動揺する有沙は少し考えて、頷いた。
「……ええ。ではお二人にお訊きします。十五歳のお二人のお誕生日、お互いにお贈りになった品は？」
「何だっけ……ああ、あれか」

「あれ、ね」
各々、思い当たる品は一つ。
「俺は確かペンダントを貰った」
「私は手鏡だったかしら」
その答えに、有沙はにっこりと微笑み、跪く。
「正解で御座います。王子、姫。先ほどまでの数々のご無礼、お許し戴きたく――」
「ちょ、やめろよ、恥ずかしいっ！」
「そうよ、今はもう――」
二人が顔を赤らめるが、有沙は気にせず続ける。
「いばらの国、最高守護魔法家並びに“プリンセス・ローズ”の従者並びに家庭教師。ティアナ・リナ・バイスで御座います。お二人を、探しておりました」
顔をあげた有沙の目には、うっすらと涙が浮かんでいた。

第十二話

＊＊＊＊＊＊

マリラクチュア大陸――それはこの世界で最も巨大な、魔力を秘めた大陸。

世界は二分されていた。片方は、魔力を大地に秘める土地に住む種族たちの社会。彼らは大地から溢れ出す魔力を用い、活用する技術を開発し、魔法を大成した。多くの物理法則や自然原理を無視するその技術は科学といった発展は遅らせたが、代わりに魔法が、その人々の暮らしに定着している。

もう片方、魔力を持たない土地に住む種族たちは、魔法を持たないが、それに対抗しうるだけの科学を編み出した。やがて発達し、人々の暮らしには科学が定着する。

魔力を持つ土地は少ない。魔力を持つのは二つの大陸とその付近の小さな島々のみ。

他の四大陸には魔力は無い。科学を発展させた彼らは兵器をも開発し、科学ではなし得ないことを簡単にやってのける魔力を求めた。

しかし魔力を持つものたちはそれ以上を求めることはなかった。魔法を持たないものたちが一方的に攻撃を続けるという奇妙な戦争が勃発する。

魔力を持つ二つの大陸の対応は真逆であった。

膨大な面積と人口、魔力をもつマリラクチュア大陸は、攻撃を通さない『壁』で大陸を覆った。

マリラクチュアの半分程の面積、人口、魔力をもつガーゼラ大陸は、兵器を魔法で攻撃し、撃ち落とした。

未だ魔法は科学技術に負けたことはない。

マリラクチュアの守護魔法、ガーゼラの攻撃魔法がただ発展しただけであった。

それでも今なお、他の四大陸は新しい兵器を開発しては、攻撃を

続けている。

――マリラクチュア大陸、いばらの国。

ティアナは世界史の教科書を閉じた。何度も何度も読んだその文章は、聡明な彼女は空でも言える。

「久しぶりに読んだけど、大丈夫、忘れてないわね」

ティアナは古くなったその教科書に手をあてる。小さな光が指の間から漏れたかと思うと、教科書は手のひらのサイズまで縮んでいた。それを、着ている黒い長いコートの胸のポケットに押し込む。

「そろそろ女王様にお会いする時間ね」

地面を擦りそうな丈のコートを翻し、ティアナは王宮の図書館を出た。

白で統一された美しいこの白の庭園には色とりどりの薔薇が、年中咲いていた。マリラクチュアには四季はあるが、この庭園に施された魔法は薔薇にとって最適の温度に保っている。

その薔薇の香漂う庭園を突き抜け、城の中心、エントランスホールから繋がる階段を上り、その他長い回廊を歩き続けること八分。やっとのことで玉座の間の扉の前にたどり着く。その大きく、豪奢な扉の前には二人の門番。彼らは、小さな訪問者に眉を顰める。

「陛下に何の用だ。ここはお前の様な子供が来る場所ではない。どうやってここに来れたのかは知らないが――」

ティアナを子供と称した門番とティアナの身長差は優に６０センチを超えている。当然だろう。ティアナはまだ本当に七歳の子供なのだから。

しかし彼女は年相応の可愛らしい声だが大人びた口調と振る舞いで、門番に告げる。

「私

わたくし

この度、最高守護魔法家に任命されました、ティアナ・リナ・バイ

スです。女王陛下との謁見を」
「何っ？」
「今度の魔法家が若いとは聞いていたが、まさかこれ程とは――まだ子供ではないか！」
二人の門番が目を丸くするが、ティアナは黒いコートと胸に付けた金のブローチを見せる。それは最高守護魔法家の証。
「この証を見れば、わかるでしょう。失礼ですよ。私は子供ですが、貴方たちより身分は上です」
丁寧だが圧迫する口調で七歳の少女は何倍も年上の彼らを嗜める。
最高守護魔法家。魔法の専門家である魔法家の国家資格の中でも、最もランクの高いSランクの魔法家の、頂点に位置する官職である。主な職務は国の守護、魔法家の統制、国民の魔法の管理と開発、そして王の付き人。その地位は、王族の次に高く、この門番たちを簡単に免職してしまうことも出来る。
「も、申し訳ありません？　貴方様との面会のご予定は陛下から伺っております。どうぞお入りください」
急に畏まった二人の門番は、重い扉を開いた。
その様子にくすりと笑い、ありがとうと礼を言ってティアナは部屋の中に入った。
「失礼致します。陛下、最高守護魔法家、ティアナ・リナ・バイスで御座います」
入るなりティアナは膝をつき、丁寧に挨拶をする。
「まあ、そんなに畏まらなくてよくてよ。さあ、こちらにいらっしゃい」
部屋の奥から、年季の入った、しかしどこか可愛らしい響きをもつ声がかかった。ティアナは顔を上げ、部屋の奥、玉座に座る優しい顔をした老婆に向かって歩を進めた。
真っ白な壁に贅沢な調度品、彫刻、絵画。頭上には高い天井に幾つもの光が煌めくシャンデリア。はたまた床には毛の長い絨毯が敷かれており、歩く度、小さな靴を優しく包み込む。

それらをジロジロと見回す事も無く、ティアナは真っ直ぐと歩き、入り口から遠く離れた玉座の前に辿り着くと、礼儀正しく礼をする。
「お呼びでしょうか、陛下」
「よく来たわね。ティアちゃん」
「ティアちゃ……陛下、子供扱いはやめてくださいと」
女王の呼び方に、真面目な表情が少し崩れ、柔らかな頬が不満そうに小さく膨らむ。
「だって子供なんですもの、まあ可愛い。それに急に改まっちゃって。ちょっと前まではおばあちゃま～って抱きついてきてたのに」
柔和な顔つきの女王は、ティアナをからかいながら、にっこりと微笑んだ。皺が刻まれた皮膚にはその年齢が感じられるが、内面はまだまだ若いようだ。
「な、そ、それはまだ物を知らない時の話でっ！　学校も卒業した今の私では考えられないことですっ！」
ティアナの親の役職の関係上、幼いティアナも女王によく可愛がってもらっていた。それはつい四年前のことなのだが、ティアナはこの四年で外見は勿論、内面の方はかなり成長していた。普通十八歳で卒業するはずの難関、国立魔法家専門学校を飛び級で七歳で卒業したのだ。
「はいはい、そうね。まだこんなに小さいのに、この国の主席魔法家なんですもの。おばあちゃまは嬉しいわ」
孫にそうするように、女王はティアナの頭を撫でた。ブスッとした顔のティアナの、下ろした長いオレンジ色の髪が乱れる。
「あら、髪が乱れてしまったわ。どれ、結ってあげましょうか」
「え？」
女王は自分の白いドレスから装飾に使われている細いリボンを二本引き抜いた。
「ちょ――女王様っ？」
「じっとしてなさい」
数分後、手馴れた手つきで結われたティアナの髪は、ツインテー

ルと化していた。
「可愛いわ。孫の髪も私がよくいじるから、慣れているでしょう。ずっとその髪型でいてね」
「ず……っ？　そ、それはご命令で？」
淡いピンクのリボンに縛られた自分の髪を触って確かめていたティアナがギョッとする。この髪型はどこか恥ずかしい。
「勿論」
しかし女王に笑顔でそう肯定されるとこの国の殆どの者は逆らうことはできない。
「し、承知いたしました」
さらさらと、オレンジ色の髪が揺れた。
「で、ね。今日私が貴方を呼んだ用件なんだけど」
「はい」
用件、と聞いてティアナは表情を七歳の少女から、国を支える者のそれに戻す。
その時だった。ドン、と扉が開く音に続いて、先程の門番の叫ぶ声。
「ローズ様！　お待ちくださいっ！　女王様は謁見中で！」
軽い足音が短い間隔で鳴り響き、玉座へと向かっていた。
「おばあちゃま！　見てー！」
現れたのは、ティアナよりも小さな子供。一見すると女の子のようだが、着ている高価そうな衣服は男の子用であった。茶色い髪は前から見ると短髪のように見えるが、よく見るとうなじのすぐ上からは可愛らしい尻尾の様な三つ編みが覗いている。
その男の子は女王に駆け寄り、一本の薔薇を差し出した。
「お庭からとってきたんだよ。あげる！」
「まあ。怪我はない？　薔薇は棘があるからダメっていったでしょう」
「だいじょーぶ！」
男の子はもみじのような小さな手のひらを見せつける。そこには

傷一つなかった。
「ありがとうね、ロー」
薔薇を受け取った女王が礼を言うと、男の子は満足げな笑顔を浮かべた。女王はこの子をローと呼ぶ。
「ちょうど良かった。ティアちゃんへの用件なんだけど」
「はい」
女王は男の子の肩を掴むと、くるっとティアナの方へ向けた。
「この子――孫の付き人兼家庭教師になってくれないかしら」
「ええっ？」
ティアナはキョトンとする男の子の大きな茶色い目を見つめる。
「見ての通り、ヤンチャでしょう。他の家庭教師は匙を投げてしまってね」
女王は慈しむように孫の頭を撫でた。
「しかし、私の本来の役目は、女王陛下の付き人のはずでは」
自分では力不足ということか。ティアナは自分の見た目と年齢を恨んだ。
「私なら大丈夫。私の周りには沢山人がいるからね。ティアちゃんがこの国一番の素晴らしい魔法家だってこともわかっているわ。だからこそなのよ。大切な孫を貴方に守ってもらいたい。この子は愛してもらう親も、もういないの。お友達は外国に幼なじみがいるだけ。他のお仕事もあって大変かもしれないけど、力になってくれないかしら？　どうせあと十年もしたら、この子が王になるのだから、いいでしょう？」
女王はどこか寂しげな表情で、ティアナに問いかける。
そんな風に言われては、断れるものも断れない。自分が見くびられているわけでもないようだし、仕える相手が変わって、家庭教師の仕事が増えただけの事である。ティアナは静かに頷いた。
「承知しました」
ティアナは小さな男の子の前で、膝をつく。
「ローズ・ウィル・シャルス王子。今日から仕えさせていただきま

す、ティアナ・リナ・バイスでございます。よろしくお願い致します」
「おばあちゃま、このおねえちゃんだれぇ？」
男の子――ローズは祖母のドレスを掴む。それを見て、女王は微笑んだ。
「新しい先生ですよ。ローを守ってもくれます。言う事をよく聞いて、大切にしなさい」
大切にしなさい――女王のその言葉がティアナの胸に染みる。女王のティアナへの愛情が現れた言葉だ。
女王がティアナに目配せする。聡明な彼女はその意を汲み、立ち上がった。小さな手が、さらに小さな手を握る。
「さあ王子、行きましょう。今はお勉強の時間のはずです」
「えー、何で知ってるのぉ」
微笑む女王に小さく会釈し、ティアナは嫌がるローズを引きずるようにして扉へと向かう。
女王からみたその後ろ姿は、まるで姉弟のようだった。
＊＊＊＊＊

第十三話

「それにしても、私が王子たちに気がつかないなんて。一生の不覚です」
ティアナ――否、有沙が申し訳なさそうに言う。しかし由姫は首を振った。
「あら、私だって貴方に気づけなかったわ。気にしないことね。似ているかどうかなんて、前世でも今世でもお互いのことをよく知っていなければ、出来ないことなのだから」
前世と今世の姿がそっくりというわけではないのだ。由姫と絢斗は両方の世界で幼なじみとして長い付き合いがあったからこそ、そこにお互いの前世との共通点を感じることが出来たまで。初対面の相手ではよっぽどの手がかりがなければ不可能なのだ。
「ま、さっき――えっと西條さん？　が見せてくれた魔法が昔の俺――ローズとの稽古の時に使ってたのとパターン似てたし、あの金平糖の魔法は確かティアナが発明したやつで、まだ広まってないはずのものだって知ってたから、俺は気づけたけどな。あ、オマケにその髪型も」
絢斗は少し誇らしげに胸を張る。有沙は少し笑った。
「有沙、で構いません。王子の稽古で実践で魔法を使っていて良かったです。この髪も、記憶が戻ってから私らしさを出す為にわざわざツインテールにしたんですが、正解でしたね」
ティアナが七歳の時、女王に髪を結ってもらってからというもの、人前では常にツインテールにしていたので、歩く度に揺れる髪はすっかりティアナのトレードマークとなっていた。
「――で、どうするの？」
由姫が辺りの惨状を見まわしながら言った。近くには有沙の光の布で隠されているとはいえ、遺体が二つも転がっているのである。
「取り敢えず、この状況を何とかしないと、ですね」

有沙は地面に縛られ、気絶したままの阿形に近づいた。
「何するつもりだ？」
「一度起こして情報を引っ張り出します。この弦には魔力を封じる力がありますので、相手は魔法を使うことは出来ませんのでご安心を」
有沙の表情が消え、右手には黄色い光が灯った。その手を、阿形の頭にあてる。すると僅かに阿形の体が反応した。
「う、あ……」
ゆっくりと、阿形の瞼が開かれる。
「阿形君。自分がしたこと、わかってるよね」
うつ伏せに縛られた阿形は辛うじて動く首を動かした。声の出処に視線を探るように巡らせ、知っている顔をみとめて少し驚いたような顔をする。
「西條、さん？　ああ、君か、さっきの魔法は。凄いじゃん。相当な魔法の使い手だったんだね」
この状況でもなお、彼は薄気味悪い笑みを浮かべ続けた。
「単刀直入に聞く。お前は誰？　言わなければ――」
阿形の言葉は無視し、有沙が低い声で問う。
「脅しでもするつもり？　やだなあ、この状況だ。僕に勝ち目はない。別に隠すことないし、ってか体したことは知らないし、何だって喋るよ。僕はガーゼラ帝国の騎士、ダマ＝サハナトス。うちの姫の警護でマリラクチュアのいばらの国に訪れて死んだ、それだけ。襲ってる理由は、西條さんも知ってるんだろ？　そこの死体の彼女は見られたから殺したけど、他の四人は皆向こうの言葉で話かけて確認した、マリラクチュアの転生者だ」
軽い口調で阿形は返す。側で立って聞いている絢斗と由姫の二人にはこの話ではまだ全く事態は掴めなかったが、有沙には理解できたようだった。有沙は無表情のまま、更に問う。
「じゃあ、自分が何故死んだのかは？」
「それは知らないよ。知らないうちに死んでた」

阿形の返答を聞いて、有沙は嘆息した。期待していた答えが聞けなかったらしい。
「わかった、もういいわ。じゃ、さようならね」
有沙の右手の手のひらに、緑色の光でできた金平糖が浮かぶ。
「何すんのさ？　僕を殺すの？　別に構わないけど。帰れないんだったら、この偽物の命は別にいらない」
阿形はその魔法を知らないようだ。冷めた目でそれを見つめ、静かに死を受け入れる。
「阿形君は殺さない。貴方（ダマ）は殺すけど」
「……？」
阿形は何かを言いかけたが、その前に緑色の金平糖が阿形の頭に触れた。途端、阿形の身体から力が抜け、瞼が閉じられる。
ティアナは阿形を縛る光の弦を解いた。灰のように、光が崩れ去る。
「これで、大丈夫なの？」
ずっと黙って二人のやり取りを見ていた由姫が口を開いた。
「はい。次に目を覚ましたときには、私たちについてと前世の記憶は失っています。ただの高校生です」
眠る阿形の顔は憑き物が落ちたように穏やかな表情をしていた。
「でもこいつ殺人犯だろ？　忘れちゃまずくねぇか？」
絢斗のもっともな疑問に、有沙は首を横に振る。
「いえ、自分が犯したことは覚えています。前世が絡んでいる動機についてや我々のことは覚えてはいませんので、殺害方法や何故自分がここで倒れているのかは説明出来ないでしょうが。前世の記憶のせいで動機ができてしまったのは不幸といえば不幸ですが、前世を真、今世を偽として今世での殺人を安易に選び、行ったのは彼自（あがた）身（くん）です。殺人を行わない選択も出来たのですから彼自身の人格の問題です」
つまり。ここで伸びているこの殺人鬼は間もなく逮捕され、裁きを受ける。彼自身殺人を自らの意思で行ったことを覚えているので

あるから、それは当然のこととして受け入れられる。
「なら、私たちが今からすることは？」
由姫はこれからの指示を取り敢えず一番事態が飲み込めているであろう有沙に仰いだ。
「魔法を一旦全て解いて、公衆電話から警察へ匿名の通報をしてずらかるだけです」
ずらかる、と有沙は俗っぽく言った。そしてふと由姫を見て何かに気づく。
「――あ。ちょっと失礼します」
有沙は少女の血がべったりとついた由姫のブラウスに手をあてる。その手が白く光ると、手を中心に血が洗われ、ブラウスは元の白さを取り戻していった。
「おおー。便利だな」
「便利ね」
絢斗と由姫が関心したように白くなったブラウスを見て頷いた。
有沙はくすりと笑う。
「王族の方々はご存知ないかもしれませんが、マリラクチュアの主婦なら誰でも使える単なる洗濯魔法ですよ。はい、これで綺麗になりました。早くこの路地から出ましょう。この辺りで公衆電話がある場所をご存知ですか？」
どうやら有沙はこの辺りの地理には詳しくないようだ。それなら、と絢斗が駅前に配置されている公衆電話を挙げる。
「では、そこに参りましょう」
有沙が手を振ると、被せられていた光の布がまた塵となって消え、無惨な遺体が露わになる。
「……っ」
気持ちが落ち着いてから改めて見る死体に、顔を歪める絢斗と由姫。先ほどは自分たちの身も危険に晒されていてそれどころではなかったが、初めて見る死体である。胃から上ってくる熱いものを必死で押しとどめた。

「行きますよ」
そんな二人を平然とした顔で有沙は促す。
三人は死体に背を向け、路地の外へと歩き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1256v/

死んだ眠り姫

2011年12月29日18時23分発行